
B T S ～転生しても変わらない～

創造主X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BTS↳転生しても変わらない↳

【Nコード】

N3818W

【作者名】

創造主X

【あらすじ】

ある日いきなりトラックにはねられ死んでしまった私。元東大生の知識を生かしてバカテスの世界に行くことにした。とある能力を持つて、私はこの世界を生きていく。『バカとテストと召喚獣↳転生しても変わらない』のリニューアル版です

設定

音橋絵里（女）

16歳 血液型・A 誕生日・3月27日 牡羊座

身長161?・体重ズキューン?。

銀髪を後ろでまとめて上げている。

目は緑色。

この小説における主人公（ヒロイン?）

異性同性共々を引き付ける魅力を持つ。つまり、超絶美人。

神の間違いのよって殺されるも、バカテスの世界に転生することを決意。

今では第2のセカンドライフを送っているが、常識のない人々に頭を悩まされている。

能力説明……

超能力・投影能力を有する。

ただし欠点として使いすぎると眠くなる。

投影能力……大体何でも作れる。食品・生き物は作るのが苦手。

念動力……重量は問わないが、その重量の何割かは自分にも負担される。

尚、念動力で全力疾走をするも、霧島翔子・佐藤美穂等に追いつか

れるなどの事があった。

瞬間移動……最大距離、5000?まで可能。しかし、本人曰くそこまで移動する必要がないので、他の部分を考慮し普段の移動距離は50メートルまでと定めている。自分に危機が迫ってもその距離を広めることはない。

接触感応……触った物の情報を瞬時に読み取る……はずなのだが、他人の個人情報に勝手に読み取っては行けないという無駄な正義心により、曖昧なことになる。
生き物に対しては特にたいした効果を発揮しないが、道具に関しては瞬時に使いこなすという不便そうで便利な点を持っている。

精神感応……テレパシー。使うことは多々あるが、本人は緊急時以外に使用した覚えがない。ちなみに、世界の何処かにいればきっと繋がると本人は信じている。

遠視能力……別に目が悪いというわけではない。遠くの物が見えると言うだけ。

他の能力……主に応用。

変装時の名前は音無理恵

好きな物……家族
嫌いな物……は虫類
実は鼻炎アレルギーー

設定（後書き）

ドンドン増えます。

P r o l o g u e (前書き)

ある日いきなりトラックにはねられ死んでしまった私。元東大生の知識を生かしてバカテスの世界に行くことにした。とある能力を持つて、私はこの世界を生きていく。『バカとテストと召喚獣』転生しても変わらない』のリニューアル版です

Prologue

それは一瞬の出来事だった。

愛読書の“バカとテストと召喚獣”を買った帰りの出来事。

「今回も面白そうな表紙だし、期待期待」

公園にさしかかる。

そこは国道沿いの公園で、利用している人も多い。

しかし、今の午後5時という時間帯だと子供達も家路につき、公園には僅かに数えられるほどの子供がいるだけだった。

不意に、視界の端にボールが映った。

「？」

顔を上げて前を見る。

ボールがトントンとアスファルトに当たって跳ね返る。

ボールを追う女の子。

信号無視のバカトラック。運転手は夢の中だ。

荷物を放り投げてただひたすらに走る。

道路に残ったのは、私とトラックだけ。

ああ……名前も知らない女の子の為に死んじゃうのか。

ちょっと、泣かないでよ……助けた意味ない。

ほら、泣かないで、今度はもう馬鹿な事しないでね。

だってさ。

ドンッ！！

鈍い衝撃と鋭い痛みが全身を走る。

薄れていく意識の中で、私はすごく余計なことを考えていた。

だって、私みたいなバカがあなたみたいな子を助けちゃうから。

意識はそこで途絶えた。

確か私、女の子助けて……

「目が覚めたか？」
佐藤沙織殿

「有名じやろう、お主の名は」

よくよく見てみれば周りは真つ白な空間が延々と続いていて、ずつと此処にいれば気が狂うほどに真つ白だった。

「どこでその情報を？」

「僕はこう見えても神じゃからな」

「……成る程」

さてと、携帯携帯。

「何してるんじゃない？」

「いえ、黄色い救急車を」

「嘘じゃないッ！ しかも頭の可笑しい人扱いするんじゃないぞい！」

いきなり現れて『神です』なんて言われても疑うしかないだろうに。

「……良いから、取りあえずお主を転生させるぞ」

「何ですか？」

「ぐ……」

……怪しいな。

っていうか、転生……か。

私、本当に死んだんだな……死ぬって分かっていたつもりだけど、やっぱり悲しいかもしれない。

「じ、実は……あの事故は、ちょっとした暇つぶしのつもりだったんじゃない」

「……暇つぶし？」

「神様も暇なときは暇じゃからの。それで、たまたまボールを拾いに行った子供をトラックの前に出してトラックは少女の手前ギリギリでブレーキが掛かって助かる……と言うシナリオじゃったのだが、お主が余計なことするから……」

何言ってるんだこの馬神。

暇つぶしで人の命を弄ぶことが許されているのか？
普通駄目だろう。

それを行って、挙げ句の果てには私を殺した。どんなことをしたのか分かってるんだろうか？

「……本当にすまんことをした。お詫びに世界も能力も好きな物を選ぶと良い」

「因みに元の世界は」

「無理じゃ」

「……………そうですか」

世界か……

候補1、ポケットモンスター……どうして？

候補2、生徒会……キャラが固定されてるだろ。

候補3、シュタインズゲート……多分死ぬ。

候補4、リリなの……パス。

候補5、ピングドラム……生存戦略はパスって。

候補6、REBORN！……主人公トロいのでパス。

あーでもないこーでもないと少し悩んで出て来た答え。

「バカテスの世界に行こう」

「決まったか？」

「世界はバカテス。能力は超能力で超電磁砲並の威力。あと投影能力。完全記憶能力。コレで良い」

「両親と住む場所はランダムで選んでおく。第2の人生を有意義に歩むが良い」

はあ。

本当に悪いことをした。

でも、ありがとうか。

……嬉しいと感じた儂はアイツよりも愚かなのかも知れないのう。

「……神に愛されし愛娘。新たな名と、身体と、心と、勇気を持つて」

儂は去っていった沙織の笑顔に負けぬよう、自分の中で一番優しい笑みを作った。

「汝に幸多からんことを」

光の先に消えていった影を、儂はずっと見ていた。

P r o l o g u e (後書き)

どうも、初めましての人も初めましてじゃない人もこんにちは。
創造主Xです。

このような形で書き直させて頂きました。

前を見て150話越えの奇跡と、ここまで付き合って下さった皆様方をありがたき思いつつ、このような形を取ることと致しましたことを、この場を使って深く謝罪と、お礼を申し上げます。

これからの長い投稿にも是非お付き合い下さいますよう、心よりお願い申し上げます。

ではまた次回。

第1話「2度目の人生と初めての戦争」

「にゅ……？ あー？ ばーぶばぶぶ？ （ん……？ えー？
何コレデジャブ？）」

目を覚ませばそこは子供部屋で、私の近くには2人の男女がいた。

「キヤーッ！ あなた！ 今絵里が何か喋ったわ！」

「いつ見ても可愛いなあ！ 絵里は！ ほーら！ お父さんって呼んでご覧ッ！」

……何ですか、コレは。

多分、私の両親。

これは重度の親バカ度。要注意に価する。

取りあえず観察するために喋ってみよう。呂律回ってないけど。

「あー？」

「「ゴブハッ！？」」 ↑吐血

「あう！？」

な、何事！？

「な、何て威力なの……可愛すぎる……ごふっ…」
「さ、流石は僕達の子……ぐはっ…」

……単なる親ばかりじゃなかった。
訂正。重度の親ばかりじゃなかった。
それじゃあ何なのか？ それは勿論、“超親バカ”と言った方が性に合うんじゃないだろうか。

そんな両親に育てられてきた。

もう、
1人で歩ける。

.....

「何やってるんですか？」

.....

「言っておくけど短パンはいてます」

「……卑怯な……ッ！」

16年の歳月は、それこそあつという間だった。

4月某日

桜並木のその道。

1年通い続けたこの路も2度目の桜を開花させていた。

緑に芽吹く木々も、紅葉も、銀色の化粧をした木々も好きだけど、やっぱり桜が一番好きだったりする。

「おはようございます、西村先生」

「ああ、おはよう音橋」

現在の私の名前。

音橋絵里。

音を繋ぐ橋と、絵の里と書いて音橋絵里。

因みに西村先生は趣味がトライアスロンと言うことから鉄人というあだ名が付けられています。

「お前も残念だったんだがな」

「結果はもう分かり切っているんですけど……」

「お前にしては珍しいな。全教科白紙。何か図っているんじゃないかって職員室で噂になってたぞ」

「いえ、純粹に睡魔に負けただけです」

わざとですけど。

「まあ、1年間頑張れよ」

「はい」

西村先生と別れを告げ、2年生の階に行く。
Aクラスの前を通って………絶句した。

「……なんですか、コレは……全く。小説で見たのと実際に見たのでは迫力が違いますね……」

むう、と口をへの用に曲げてFクラスに行く。

現在時刻はギリギリと言ったところです。

……少々時間にルーズでしたか。

「ここがFクラス……少し、というかかなりボロボロですね……」

後ろからこっそり入って空気と同化します。

これぞ音橋潜身術（仮）ですね！

「……あれ？ 絵里？」

『『『『何イツ！？！？！？！？！？！？！？！？！』』』』』

「……美波？」

「あ、ごめん……」

美波の一言によって私の存在が明らかになっていきます。
折角頑張ってたのに……

「あ、あの、遅れて、すいません！」

「丁度良いところですね。姫路さんも自己紹介して下さい」

……え？ 自己紹介中だったんですか？ というか瑞希？

「あ、はい。姫路瑞希です。これからよろしくお願いします」

「音橋さんお願いします」

「うう……お、音橋絵里です。宜しくお願いします」

渋々自己紹介をします。

あんまり目立ちたくないんですけどね……

「あの、質問です！」

「はい？」

「なんでここに居るんですか？」

「えっと、試験当日に熱を出してしまいまして」

「私は寝てましたね」

「ああ、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ理科か。あれ難しかったよな。」

「俺は弟が事故にあったって聞いて……」

「黙れ一人っ子」

「前の晩彼女が寝かせてくれなくて」

「今年1番の大嘘をありがとう」

これは想像通りですがある意味想像の斜め上を行きましたね。

「それでは姫路さんは席について下さい」

「はい」

明久と雄二の席の近くに座る瑞希。

私の席もみんなに近いんですけどね。

1番後ろの雄二の後ろ。それが私の席です。

「ひめ「姫路、身体は大丈夫なのか？」」

……成る程。私も面白そうだし弁乗しますか。

「あ、大丈夫です」

「そっか。でも気を付けてね？　ぶり返すと行けないから」

「はい……………って、吉井君!？」

「「姫路（瑞希）、明久が不細工でスマン（ゴメン）」」

切り返しが速いですね、雄二。

そして私もよくあわせられましたね

「酷!？　つというか何で絵里まで!？」

「まあ、ノリですな」

「余計に酷い!？」

「い、いえ、吉井君はその……………目もぱっちりしてて顔のラインも細くてきれいだし……………」

ごによごによと言いよどむ瑞希。

やっぱり明久思いですね……………良い子です。

「まあ悪くはないか。そういえば明久のこと好きだっていった奴もいるしな」

「えっ!？　誰？　「そ、それって誰なんですか!？」」

「ああ。私も知ってますよ？　確か久保……………」

「久保さん？」

「利光だったかな」

私の言葉に引き継ぐように雄二が言います。

「って明久、さめざめと泣かないで下さい」

「気にするな、半分は冗談だ」

「残りの半分は！？　ねえ！？」

「明久、そんなに騒ぐと先生に」

「はい、その人たち、静かにして下さいね」

パンパン　↑教卓を叩く音

「す、すいませ」

ガラガラ……　↑教卓が崩れる音

「……替えを持ってきます」

ガラガラと戸を開けて出て行く先生。

「こ、此処まで来ると呆れを通り越して敬意を表したくなりますよ……」

瑞希は設備の酷さを理解したようで苦笑していますね。
ですが……そろそろ私もこの設備に飽きました。

やはり誰かが戦争の引き金を引いてくれないと……

所で。

「試召戦争をAクラスに仕掛けるとはどういったご用件で？　明久」

「ひゃあっ！？　いきなり後ろに來ないでよ絵里！？」

テレポートで明久の背後に立ちます。

「そうだろう？　いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ。そこで代表としての提案だが、試召戦争をやってみないか？　もちろん最終目標はAクラスだ」

……はっきり言いましたね。
でもそれだと……

「おい、Aクラスが目標かよ……」

「勝てるのか？」

「俺は姫路さんと音橋さんがいれば何もいらない……」

「姫路さん結婚してくれー！」

「音橋さん！　俺と愛の逃避行をしようー！」

空耳空耳。

今日は耳の調子がおかしいみたいです……

「まあ慌てるな。俺たちFクラスにはAクラスに勝てる要素がある」

雄二の言葉にまたざわつき始めるクラスメイト達。

私もこの時だけは大人しく聞くことにしました。

「勝てる要素？」

「ああ。まずは……おい土屋。姫路と音橋のスカートを見てないでこっちに来い」

「「！？」」

「……………（ブンブンブンブン）」

首を横に激しく振る男の子。

「コイツがあ有名な性職者だ」
ムツツリーニ

「なっ……あのムツツリーニか？」

「見ろ、あそこまで否定してるぞ」

「まさにムツツリの名に恥じない男だ」

「それに木下秀吉。演劇部員でAクラスの木下優子の双子の弟だ」
「む？　そこまでいわれるものかの？」

「あの、木下優子の双子の弟……」

「秀吉、結婚してくれ……」

「まさに男の娘」

途中からもう変なことになってますよ？

「それに姫路だっている」

「そこは納得だな」

「ああ」

「そして……音橋だ。おい、見せてやれ」

「……はいはい」

私は、サイコネシス念動力で、雄二のもとへ行く。
言葉で言っても嘘。

なら行動で表した方が速いでしょう。

「ごらんの通り、超能力者だ」

ついさっきまでは“ダーリン”で有名だったんですけど。

「ちょっと、なんで今僕の名前を挙げるのさ！ 雄二！」

「分らないのか？ だったら教えてやる。こいつの肩書きは観察かんさつ処分者しよぶんしやだからな」

そんなに素直に言っちゃうとまた……

「おい、観察処分者って……」

「確かバカの代名詞って言われてるよな」

「ち、違うよ。ちょっとお茶目な16歳につけられるあだ名みたいな物で……」

「確かに観察処分者はバカの代名詞だ」

「雄二、キサマああああ！！！！」

「明久落ち着いて下さい」

「ぐべはっ！？」

サイコキネシス

一応、念動力で取り押さえます。

多分このまま放っておくと暴れ出しかねませんからね。

「な、何をするんだ！ 絵里！」

「明久が暴れ出しそうなので取り押さえましたね」

「よくやった、音橋」

「お褒めに頂き光栄です、雄二」

「話それてるけど、観察処分者って召喚獣の受けたダメージも召喚者にかえってくるんだろ？」

「げ……じゃあろくに召喚出来ない奴が1人いるって事かよ」

Fクラスと言えど鋭いですね。

観察処分者とは、生徒に与えられる特別な称号です。

成績も最底辺、態度も最底辺の生徒に与えられるその称号には召喚獣が特別に物体に触れるという利点があります。それにより教師達の目の届く範囲での行動及びその他が……

まあ簡単に言うと、悪いことをしたので観察処分者の称号を与えます。

観察処分者の召喚獣は特別に物に触れるので、教師の雑用をして下さいということですよ。

ただし、その利点には不利な点もあります。

物に触れられる代わりに、召喚獣が受けたダメージの何割かが召喚者に帰ってくるという物ですよ。

まあ例として、召喚獣が腕を壁にぶつけた痛み。

それが召喚者にちょっとした痛みとして帰ってくると言った感じですよ。

「大丈夫だ。居ても居なくても同じようなもんだからな」

雄二。

明久がマジ泣きしてますよ。

「もちろん、俺も全力を尽くす」

「おい、坂本って小学生の頃神童って呼ばれてなかったか？」

「ッてことは、実力はAクラス並の奴が3人もいるって事かよ」

いいえ。

雄二は今はそんなに頭良くないです。

「それならAクラスも夢じゃないかもしれないよな？」

「ああ、システムデスクも夢じゃないぞ」

「おしっ！ 打倒Aクラス！」

「よしっ、まずは肩慣らしにDクラスを制圧するぞ！」

『『『『『おおっ！！！！』』』』』

「ならば筆^{ペン}を取れ！ 点数を稼^{ペン}げ！！！」

『『『『『おおっ！！！！』』』』』

『『『『『打倒Dクラス！！！！』』』』』

打倒Dクラスの目標を掲げ、Fクラスの士気が最高潮になっていきます。

さて。これから忙しくなりそうですね……

第1話「2度目の人生と初めての戦争」(後書き)

この話しだけでおおよそ3話分。
んー……すげえ。

「どうも、音橋絵里です」

あ、勝手に出て来た。

「毎日投稿、昔みたいに出来ますか？」

分からないけど頑張ってみるよ……
じゃあ、毎日同じ時間に投稿しよう。
今日と同じ時間……とか？

「ま、頑張ってください」

それではまた次回！

第2話「戦争終了のお知らせ」

「これで全員の補充試験は終わったか？」

「ええ。その様ですね」

「なら残りは……」

「宣戦布告、ですか」

補充試験が終わったところで私と雄二は話し合います。
そしてその宣戦布告の適任者を見つめます。

「な、何で僕を見るの？」

「明久、お前がDクラスに宣戦布告してこい」

「え？ でも宣戦布告って、大抵行った人が痛い目に遭うよね？」

「明久、宣戦布告ってなんだか格好いいですね。瑞希とかも度胸がある人の方が好きだって——」

「行ってくるよ！」

………

「バカだな」

「バカですね」

数分後

「騙されたアッ!!」

ドサアッ

スライディングをして来た明久。

「Dクラスの奴ら凄い形相で殴りかかってきた!」

「計画通りです。それに騙されたとは失礼な。後先考えずに何も聞かないで突っ走っていったのはあなたでしょうに」

「……そこを突かれると痛い」

はあ……凶星、だったんですね。

「そんなことよりもだ」

「そんなこと!?!」

「宣戦布告はやってきたんだろうな?」

「……してきたよ。取りあえず明日の午後にしたけど……」

むすっとしている明久。

仕方がありませんね……

私は笑顔を作って明久に向き直る。

「明久、よくやってくれましたね」

「……」

頭を撫でてあげる。

何か小動物みたいで可愛いですね……それに。

「……こういうバカが世界を切り開いていくんでしょうね……」

「バカって言った!？」

「明久も丁度良い単語を拾っていきますね……まあ、その方が良い時もありませんが」

そつと手をどけて、秀吉の隣まで行く。

さて、と。

「これ、頼まれてた服です」

「おお！ すまんのじゃ、絵里よ」

「いえいえ。それじゃあさつさと帰りますか」

「そうするか」

荷物を纏めて歸り支度を済ませる。

「さて、帰りますか」

「うむ」

私と秀吉は2人でさっさと帰る事にしました。

— — — — — 明久 side — — — — —

我ながら良くもまあやった物だと感心してしまう。
明日から試召戦争だっていうのに、何で教科書なんて忘れちゃったんだろ。

「はぁ……ま、いっか」

教室の戸に手をかけて一気に開ける。

「ただいまー！ 僕の愛しの人よー！ 何て……………」
「……………ほえ？」

ボケをかましながら入ったら何故か姫路さんがいた。
手元にはピンク色の可愛い便せんがあった。

「よ、吉井君ッ！？」

「姫路さん……………？ 何でまだいるの？」

「え、えっと、これは……………その……………！！ あ！ いえ、違うんでー
ーきゃっ！？」

ひらりと舞う便せん。

そこには『あなたのことが好きです』

……………うん？

取りあえず便せんを拾い上げる。

（オイ見ろよ。初めて見たぜ？ ラブレター。今後姫路のことは諦めた方が良いな）

何だ、心の中の悪魔か。
ふっ。バカだなあ。

「はい」

「あ、ありがとうございます……」

「所で、変わった不幸の手紙だね」

（コイツ認めない気だ!?!）

黙るが良い悪魔め。

「あ、あの、それは酷い誤解なんですけど……」

（ホラ。やっぱりラブレターだ）

馬鹿なッ!?! どうして!?! 僕はこんなにも不幸になっているのに!

「お、落ち着いて下さい明久君!」

ジタバタしていた僕の手を優しく握って止めてくれる姫路さん。
誰だよ。姫路さんの思い人。羨ましい……

「……姫路さん。その手紙の相手はFクラスの人なの?」

僕はきっとアイツだろうと思いつつも聞いてみることにする。

「はい」

戸惑いながらも真っ直ぐな声で返事をする姫路さん。

畜生……

「姫路さんは、その人のどこが好きなの？」

「えっと、内面的なところが……あっ、もちろん外見もです！」

完璧に雄二だな。

でも確認しなくちゃいけないことがある。

「姫路さん。これから僕が言う番号をメモって？　大丈夫。とっても腕の良い『脳外科医』だから」

「私は気が狂った訳じゃありませんよ!？」

「え？　そうなの？　じゃあ次のは大丈夫。こっちはとっても評判の良い『精神科医』だから」

「だから違いますよ!？」

畜生、雄二め……

「……その手紙、良い返事が貰えると良いね」

「……………はいっ!」

一瞬呆けた顔を見せた姫路さんも、次の時には明るくて素敵な笑顔を浮かべていた。

明久 s i d e E N D — — — — —
— — — — —

絵里 s i d e — — — — —
— — — — —

――――

翌日の朝。

FクラスとDクラス。

学力的にはどっちが高いとも低いとも言えないこのクラス同士での
試召戦争。

それもあと3分で始まるどころまで来ました。

「今説明したとおりに頼む。いいか？　あくまでも目的はAクラス
だ！」

『『『『『おおおおおおお！！！！！！！！！』』』』』

盛り上がりも最高潮に達したと思われる今、カウントダウンを出来
る時間帯にまでなっていました。

「それではカウントダウンしてみますか。5」

ゴクリと喉を飲み込む音がどこからか聞こえてきた気がしますが。

「4」

それぞれが定位置につき始めます。

「3」

廊下組は何故かクラウチングスタートをとっています。

2

腰を上げるそれぞれ。

1

ダッ

走り出すクラスメイト達。

さてと。

30分後

「雄二、暇です」

「我慢しろ、音橋」

「労働条件の改善をお願いします」

「そう言えばお前の超能力について詳しく聞いたこと無かったな」

「……………そうでしたか？」

無視されましたか……

「どんな能力があるんだ？」

「私の能力は物を作る能力……まあ、投影能力と超能力に別れます」

ね」

「ふむ……」

「超能力は多分雄二がよく知っている物で大体はあっていると思いますよ？」

「サイコキネシスとかテレポートとかか？」

「はい」

そうですね……なら説明しておきましょうか。

「サイコキネシス、テレポート、クレヤボヤンス、プレコグ、サイコメトリー、念動力、瞬間移動、透視能力、予知能力、接触感応、念写、発火能力とか。まあ対して珍しくもな——」

雄二の目が珍しい玩具を見つめる子供のようで少し面白い事になっています。

「ふふっ。じゃあテレポートについて教えてあげましょうか？」

「良いのか？」

「ええ」

暇つぶしにもなりますし。

「テレポートをするときにイメージするのは、頭の上に輪っかが出来て……それが身体をすーっとしたにおりていく感覚ですね。体験してみます？」

「お、良いのか？」

「それじゃあ手を繋いで下さい」

「繋がなきゃ駄目なのか？」

「着地、失敗しますよ？」

「……頼む」

その後何回か瞬間移動を繰り返しました。

[illegible]

「伝令です！ 吉井隊長が、偽情報を流して教師をおびき寄せて欲しいとのことですよ！」

「船越教論を呼び出すぞ。内容はごによごによ……で、だ」
「ぶふっ！？ さ、流石です！」
「おお！ 頼んだぞ！」

この間約5秒。

流石に私もついていけない会話です。

「雄二、一体何を……？」

「まあ聞いてれば分かる」

「聞く……？」

ピンポンパンポーン

お馴染みの放送前の音がスピーカーから流れてきます。

『船越先生、船越先生』

？ さっきの伝令君……？　　というか行き遅れで単位を盾に生徒に迫ってくる船越先生をどうするつもりなんですか……？

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

「あ」

『生徒と教師の垣根を越えた男と女の大事な話があるそうです』

クラスメイト達が私を含め全員が敬礼をし始めます。

明久……頑張って下さい。

「私行ってきますね」

「ああ」

テレポートを使い、明久の近くまでテレポートします。

「明h「ああ、霧島さんのスカートが捲れている！」」

ざざあっ！　↑全員が振り向く音

明久の声が響き渡り少々驚きつつも呆れてしまいます。あんな一言で私以外の男女全員があっちを見るなんて……まあ、霧島さんは綺麗ですからわからないこともありませんが……

……私にとっては少し怖いですけど……

まあそのあとはガラスが割れたり消火器が噴射されたりスプリンク

ラーが誤作動したりと色々ありました。

「……………気のせいでしょうか？ 何故か殺気で満ちあふれていたのですが……………」

色々な意味で危ういと感じたDクラスが一度撤退していったところを見計らいながら私は出て来ます。

「良くやったぞ、明久」

「うん。ところで校内放送聞こえてた？」

「はっきりくっきりしつかりと」

「……………雄二、絵里、須川君がどこにいるか知らない？」

「多分もうそろそろ戻ってくるだろうな」

「へー。そう」

因みに明久が手にしているのは包丁と即席ブラックジャックですね。

「大丈夫。やれる。僕なら殺^やれる！」

「人は殺しちゃ駄目ですって……………」

「ああ、僕の包丁とブラックジャックが！？」

テレポートで私が没収します。

危ないですし。

「くそっ！ こうなったらムツツリーニにスタンガンを借りて……………」

「因みに放送指示は俺が出した」

「しゃあああっ！」

「落ち着きなさい」

グシャッ ↑取り押さえる音

「ぐぺっ」

「そろそろ、Dクラスの代表を討ち取りに行くぞ！」

「1番気をつけないければいけないのは近衛部隊じゃの」

「秀吉の言うとおりですね……私が行きたいです」

「……………勝手に暴れてこい。もう面倒だしな」

「じゃあ1分で片づけてきますね」

テレポートでDクラス代表の前に行く。

「Fクラス音橋絵里、Dクラス代表に現代国語で挑みます」

「はっ!？」

「試験召喚です」
サモン

「あ、えっと、試験召喚？」
サモン

お馴染みのかけ声と共に足下に幾何学的な魔法陣が現れます。勿論そこから出てくるのはデフォルメされた自分の姿です。

私の召喚獣はどこかの制服みたいな服と日本刀2本に小さな盾が1つです。

……別に成績は悪くないんですけど……

「Dクラス 平賀源二 現代国語 VS Fクラス 音橋絵里
現代国語

129点

5000点」

『『『』はい?』』』』

まあ驚くのも無理ないですか。

「え、5000点？」

声、裏返ってますよ？

「失礼します」

ポフンツ ↑平賀君の召喚獣が消える音

「呆気ないですね……」

そっと呟いた声はDクラスの叫び声によってかき消された。

第2話「戦争終了のお知らせ」(後書き)

テスト時

超能力を使って全力でテストを受ければ万越えも余裕。

音橋データ。

第3話「Bクラス戦始動」

Dクラス戦が終わったその翌日の朝。
僕はあのボロ教室に向かう。

「うーっす」

「明久、ギリギリだぞ」

「うん知ってる。所で絵里は？」

「……あそこだ」

呆れ顔で教室の隅を指さす雄二。

あっちか。

「……………絵里!？」

そこには卓袱台に突っ伏している絵里の姿があった。

「な、何してるとですか？」

「何弁ですか、明久……………」

「何があったの? 絵里」

「……………な、何でも、ありませんよ……………」

そう言いながら立ち上がろうとする絵里。

だけど腕にうまく力が入っていなくて立てないでいた。

それどころか身体全体が痙攣してない……？

「話の途中で悪いが良いか？」

「ど、どうぞ……」

「あ、うん良いよ」

「明久、良いのか？」

「へ？ なん——ぐぼへっ!？」

僕の身体に鋭い痛みが走る。

「し、島田さん、おはようございます……」

「おはようじゃないわよッ！ あんた、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽きたらず消火器と窓の事件の犯人に仕立て上げたわね!」

「さ、さあ何の事やら」

声が震えている。

自分でも分かるほどにだ。

「まあ、本来なら掴みかかっているんだけどもう充分罰が下っているようだし許してあげるわ」

もうすでに掴みかかっているし、殴っているけどね……

って、罰？ 何のことだろうか？

「1時間目のテストの監督の先生………船越先生だって」

聞いた瞬間、僕は廊下を疾走した。

— 絵里 side —

「うーあー」

変な声の発生源はお馴染みの明久。

船越先生に朝から追いかける事となった明久は逃げ切る為に近所のおじさんを紹介したらしいですし。

「うむ。疲れたのう」

「……………」
（コクコク）
「……………」

いつの間にか秀吉と康太が来ていて話しに混じってきます。

康太、何気に写真を撮らないで下さい。

「みんな、Bクラス戦について話したいことがあるから屋上に来てくれ」

「
「
「
「
「
り
よ
ー
か
い
」
「
「
「
「
「

声をかぶせ、私達は立ち上がる。

どうやらこの先屋上は頻繁に使う事になりそうですね。

「そういえば坂本、次の目標はBクラスなの？」

「そうだが？」

美波の質問にサラッと答える雄二。

この前の試召戦争の時に壊したのはBクラスの室外機。
到底Aクラス戦の為だとは思えませんね。

「どうしてよ？　ウチらの目標はAクラスでしょ？」

「ああ、その事か。今のFクラスの戦力じゃどんな策を練ろうがAクラスなんかには勝てないぞ」

「まあ当然ですよ。実力の差が違いますし、何よりAクラスには点数が高いので圧倒的なやる気があるのに対して、こちらの強みは設備の酷さからくるモチベーションと雄二の立てた作戦だけです。その作戦もあの霧島さんには通じないでしょうし……クラス単位で勝つのはちよつと無理があります」

恐らく此処にいるのはFクラスの主戦力です。

他は恐らく雀の涙程度の戦力ですね。

「じゃあウチらの最終目標はBクラスに変更って事？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやるつもりだ」

「雄二、さっきと言ってることが違うんじゃないの？」

明久でさえも疑問に思ったようですね。

「雄二が言ったのはクラス単位では勝てないと言ったんですよ」

「絵里の言うとおりで。だから、一騎打ちに持ち込む」

「？　どうやって？」

「はあ………何のためにBクラスと戦おうと思って居るんですか？　試召戦争で上位クラスに負けた場合、設備が1つ下がります。では、私たちFクラスに負けた場合は？」

「悔しい」

「康太、ナイフを1つ用意して下さい」

「僕たちの設備と入れ替わります」

瑞希、余計な手出しは不要ですよ……

「まあ正解です」

「で、その設備を入れ替えない事を条件にAクラスに攻め込ませる。さっき言ったように俺たちの最大の強みはモチベーションだ。同じ連戦ならこっちに分があるからな。そこについて一騎打ちに持ち込む」

作戦の要点はこんな感じですね。問題があるなら一騎打ちで勝てるかどうかと言うこと……

「で、明久」

「何？ 雄二」

「今日テストが終わったら、Bクラスに宣戦布告してこい」

「嫌だ。行くなら雄二か絵里が行けばいいじゃないか。絵里は超能力使えるでしょ？」

「バカも痛い目に遭うと学びますか。」

「仕方ありませんね……」

「それでしたらじゃんけんで決めましょう。心理戦有りで。明久がシードで良いですよ。負けた方が行くと言うことで良いですよね？」

「それなら良いよ」

さすが明久です。心理戦がどんなに恐ろしいか分かっていますね。因みにシードは不利です。

「じゃあ、僕はグーを出すよ」

「そうですか、それなら、私は————」

明久、幸運を祈ります。

「――明久がグーを出さなかったら明久の命を貰います。康太、ナイフ用意しといて下さい」

「ちよっ……!?! 何その心理戦!?!」

「行きますよ。じゃんけん!」

「わああ!?!」

パー (私)

グー (明久)

「決まりですね。行ってらっしゃい、明久」

「絶対に嫌だ!」

「大丈夫だ明久。今度は殴られたりしないからな」

「何を根拠に!」

「Bクラスには美少年好きが多いそうだからな」

「そっか、それなら安心だねっ!」

本当に乗せられやすいですね……

あ。でも……

「でも、明久不細工ですし……」

「失礼な! 365度どこから見ても美少年じゃないか!」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「5度ですね」

「3人なんて、大っっ嫌いだ!」

明久は目の端に涙を溜めながらかけていきました。

「……私も行ってきますね」

「別に良いんだぞ？」

「いえ。そろそろ飴の時期かな、と」

「頼んだぞ」

「了解です」

テレポート！

ドンッ！ ↑私と明久がぶつかる音

「きゃっ!?!」

「うわ!?!」

背中に伝わる廊下の冷たい温度。

目を開けてみると明久が私に覆い被さるような形になっていて……

……

「……………あの、えっと……………／／／／／」

「明久、どいて下さい」

……………要約すると、重いです。

「あ、ご、ごめんっ!」

「良いんですよ。別に気にしませんし」

「（……………そこは気にして欲しいって言うか……………）」

身体を起こして腰をさすります。

……………大丈夫ですね。

「Bクラスに行きましようか、明久」

「あ、うん……」

ガラッ

Bクラスの扉を開けます。

「失礼します。Fクラス使者の音橋絵里です」

「よ、吉井明久です……」

「私達Fクラスはあなた達Bクラスに試召戦争を申し込みます！
開戦日時は明日の午後でお願いします」

「へ？ あ、あれ……？ え？」

全く……

「では失礼しました。明久、行きますよ」

「あ、うん……」

扉を閉めます。

今回はうまく言ったようですね。

「それじゃあ戻りますか」

Fクラスに帰ってくるとすでに放課後でした。

「先に帰ってるからな。明久」

「明日の午前中もテストですから頑張って勉強して下さいね？」

「うえ……」

「もし頑張ったら学食を奢りましょうか？」

「本当！？」

「はい。ただし頑張ったらですよ？」

「頑張るッ！」

……子供ですか。

そんな突っ込みを心の中でしつつ、私は荷物を纏めました。

[illegible]

午前中のテストが全て終わり、一段落を着いた頃。雄二が前に出ます。

「総合科目のテスト、御苦労だった」

因みに昼食を食べ終わっているのでクラスメイト全員が揃っている状態です。

「さて……午後はBクラスとの試召戦争に突入するが……やる気は十分か？」

「お！お！お！お！お！お！お！」

下がる気配を見せないこのモチベーション。

私達の唯一の武器ですし。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は負けるわけにはいかないからな！」

『『『『『おおおおお!!!』』』』』

「ということなので前線部隊は姫路瑞希に指揮を執ってもらうことになります」

「野郎共、きっちり死んでこい！」

「が、頑張ります！」

『『『『『ぬおおおおお!!!』』』』』

私からも一言言っておきます。

今回の廊下戦で費やした人数は50人中40人です。
なので教室に攻め込まれると痛いですね。

不意にチャイムが響きます。

そしてそれと同時に40人が出て行きます。

「いたぞ！ Bクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

そんな言葉が廊下を飛び交います。

「さて……」

私は死ぬほど暇です。

なので監視カメラを伝って現状を把握しますか。

パソコンを開いてコードを繋ぎます。

学園中ならこれでどこでも覗けますね。ただ女子更衣室や男子更衣室は流石にやってませんが。

画面に映し出されたのは戦争の様子。

先生方は戦争を観覧し、生徒達は相手を叩き潰す為に全力でぶつかり合っています。

あ、目つぶしに誰か砂投げてる。

画面を何個かに分けて見ていると気になるところがありました。ただしそこは……

「これは酷い点数差ですね……」

思わず声に出してしまいます。

BクラスとFクラス。ほぼこちらに勝ち目がないと思われるそんな戦いに、私達は勝ちを求めています。

全ては明久から始まったことですが……

「お、遅れ、ました……。ごめ、んな、さい……」

とぎれとぎれのか細い声。恐らく男子達の全力疾走について行けなかったのでしょう。

……この姫路瑞希を思いやる一心で、この試召戦争は成り立っているのですから。

そんな瑞希をBクラス生徒は警戒します。これまで幾度となく戦争の要となり、代表にとどめを刺してきた瑞希は要注意人物でしかないのですから。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込めます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしく願います」

「律子、私も手伝うよ！」

1対1だと分が悪いと踏んだのか、2対1の状況を作ったBクラス

女生徒。

でも2対1でも――

『試獣^{サモン}召喚!』

――分が悪いですよ？

瑞希の召喚獣が身につけているのは『腕輪』と呼ばれる物です。
腕輪はある一定の点数を超えたときに付けられる特殊装備の様な物
です。

それは多種多様で、確か瑞希の効果は……………

「ちよっ!? あれって……………!?」

「すみません!」

キュボツツ! ↑召喚獣が消える音

「「きゃあああ!?!」」

瑞希の腕輪から放たれたのは熱線です。
腕輪はこのように多種多様なすよね。

一足遅れて点数が表示されていきます。

「Fクラス 姫路瑞希 VS Bクラス 岩下律

子&菊入真由美

数学 412点 VS 189点 &

151点」

流石瑞希、と言ったところでしょうね。

さて。他の所は……………

「ち、近寄るなッ！ 近寄ったらこいつを補修室送りにするぞ！」

ドラマ？

そんな考えが頭の中を走ります。

犯人が窮地に追いつめられると大抵がこういう事を言うというあの伝説の台詞を実際に言うなんて……

人質の顔が鮮明に映し出されていきます。

そこにいたのは良く見知った顔であり、ポニーテールのよく似合う……………

「美波？」

何で美波が捕まっているんですか？

美波なら多分捕まる前に相手の関節を逆方向に曲げた挙げ句、○○○
を××で△△しそうなんですが……

まあこういう時のテレパシーですね。

「（美波、聞こえますか？）」

「（絵里！？）」

「（テレパシーです。どうして捕まってるんですか？）」

「（さっき吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなったって聞いて……）」

「（……そ、そうですか……）」

明久はモテる男のようです。

まあ、瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなさそうなのには納得できますが。

「島田さん！」

「よ、吉井！」

これもまたドラマのシーンで良くお見かけしますね。

「そこで止まれ！ それ以上近寄るなら、召喚獣にとどめを――」
「総員突撃用意――！」

「それで良いんですか！？」

げ、外道すぎませんか……？
本当に今叫んじやいましたよ……

「ま、待て吉井！ コイツがどうして俺たちに捕まったと思ってる？」

「バカだから」

「殺すわよ」

即答ですか。

でも強ち間違ってはいないかもですね？

「コイツ、お前が怪我したって偽情報流したら部隊を離れて1人で保健室に向かったんだよ」

美波は良いお嫁さんになれそうですね。

「島田さん……」

「な、何よ」

「怪我をした僕にとどめを刺しに行くなんて……あんたは鬼か！」

「違うわよ!」

毎度の事ながら関節を極められたりすれば当然の答えですね。

「ウチがアンタの様子見に行っちゃ悪いっての!?! これでも心配したんだからね!」

「島田さん。それ本当?」

「そ、そうよ。悪い?」

狼と羊飼いの、という作品を知っているでしょうか。

繰り返される嘘は信憑性を失う、という事を題材とした物語です。しかし、私自身が捉えたこの物語の本当の意味は――

「総員突撃いーっ!」

「どうしてよ!?!」

――気軽に嘘を付いては行けない。本心を偽っているといつか痛い目に遭う。

そんなことを、考えてしまいました。

「あの島田さんは偽物だ! 本物にそんな優しさがあるわけない! 本物は喜んで僕を殺りにくるに決まってるじゃないか!」

正しいと思ってるのが不思議です。

「おい待ってって! コイツは本当に本物の島田だって!」

「黙れ! 見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ!」

「だから本当なんだって!」

「Bクラス 鈴木次郎 V S Fクラス 田中明
英語 33点 V S 65点」

「Bクラス 吉田卓夫 V S Fクラス 須川亮
英語 18点 V S 59点」

相当消耗していたから人質を取ったんですね。

明久はまだ気付いていないようですが。

「みんな、気をつけろ！ 変装を解いて襲いかかってくるぞ！」

案の定と言ったところですね。

「よ、吉井酷い……ウチ、本当に心配したのに……」

「まだ白々しい演技を続けるか！ この大根役者め！」

「本当だよ！ 本当に心配したんだから！」

美波が涙目になり始めてますね……珍しい。

………じゃなくて、そろそろ教えてあげますか。

「（明久。絵里です）」

「ん？ 絵里、丁度良かった。どこにいるか分からないけど、今からこの島田さんの名をかたった偽物を倒すから協力して貰えるかい？」

「（できませんよ。わたしはFクラスの教室にいるんですから……）」

この鈍さは……瑞希と美波が可哀想ですね。

「（まあいいです。ところで美波は『明久が瑞希のパンツ見て鼻血

が止まらなくなった』と聞いて心配していたらしいですよ？」

「包囲中止！ コレ本物の島田さんだ！」

逝ってらっしゃいます、明久。

「島田さん、大丈夫だった？」

美波に良い笑顔で手をさしのべる明久。

「……………」

「無事で良かったよ。心配したんだからね」

「……………」

「教室に戻って休憩すると良いよ。疲れてるでしょ？」

「……………」

「それにしても卑怯な連中だね。人として恥ずかしくないのかな？」

「……………」

「あー、島田さん。実はね」

「……………何よ」

ようやく、明久の呼びかけに反応する美波。

それに明久は満面の笑みを浮かべて致命的な言葉を言いはなっ
てしまいました。

「僕、本物の島田さんだって最初から気付いてたんだよ？」

廊下に真っ赤な水たまりと、真っ赤なオブジェが出来上がりました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「絵里、こんなところにおったか」

「秀吉？　どうかしたんですか？」

戦争もほとんど終わって人がいなくなってきたので、購買で板チョコを買っていると秀吉が走ってきました。

「どうかしたんですか？　もう教室に戻るんですが……」

「それなら道すがら話すでしょう。どのみち教室に集合じゃからのう」

「？　どうしてです？」

作戦会議なら前と同じで屋上でやれば良いだけのこと。
なのになぜ、わざわざ教室でやるのでしょうか？

「実は明久がまるで誰かに散々殴られた後廊下に頭から叩きつけられ、更に身体全部の関節を外されたように倒れていたのじゃ。そのせいで身体がボロボロじゃからの。全く……いくら戦争と言っても本当に怪我をする必要は皆無じゃというのに」

「……………そうですね……………」

そこまでになっていたなんて……

「と、ところで、結局Bクラス戦はどうなったんですか？　勝敗が決まった感じではなさそうですね……………」

「うむ。今相手を教室に押し込んだところでな。協定通りの休戦中じゃ」

「協定ですか……何か裏があると思えてきてなりませんね」

Bクラスの代表はあの根本恭二。

何を企んでいるか分かりませんが……

昨日消えていた瑞希のラブレター（ファルコン情報）も気になりますし。

ただ落とした。それだけなら良いんですが……

「ただいんです。明久は生きてますか？」

「ん？ やつと戻ってきたか。明久ならまだ生きてるぞ」

明久は辛うじて息をしていました。

本当に悪いと思ってますよ？ 流石に。

「良かったです。さすがにあのやり方は死んでるかと思いました」
「そう感じたんなら助けてよ……身体の節々が猛烈にいたいんだけど」

「私はその場にいませんでしたよ？」

「……………（トントン）」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあったか？」

康太が雄二の後ろに立っています。

今回康太は役目が来るまで私と共に情報収集といった仕事を担っています。

「ん？ Cクラスの様子が怪しいだ？」

「……………（コクコク）」

「あ、そこも私が気になっていたところですよ」

「絵里も知ってたのか？」

「はい。この文月学園……いえ、世界のどこであろうと、私の情報網は永遠ですからね。でも試召戦争の準備をしていることはどこかに戦争を仕掛けるつもりですから……おそらく、漁夫の利といったところですね」

「ああ……まあ、こういうことならCクラスと協定を結ぶか。俺たちが勝つとも思っていないだろうし、Dクラスを使えば難しいこともないだろう」

「そうだね。今からいこうか」

まだ4時半と言うこともあります。

恐らくクラス内にも誰かかしらが残っていることでしょう。

ブー……ブー……！

「何の音？」

「あ」

「？　どうかしたのか？」

「……忘れていましたよ。最大の重要ポイントを」

原作を壊してしまうかも知れない。

けれど、私だってクラスのために貢献したい。

見る側から、やる側へ。

その一步を、漸く踏み出せるような気がした。

別に良いですよね。

こんな世界があっても

ねえ？ 神様……………

第3話「Bクラス戦始動」 (後書き)

毎日更新は無理そうなので、不定期更新に移行します。

出来るだけ速く更新していきますね！

第4話「双子」

「Fクラス代表の坂本だ。代表はいるか？」

Cクラスの教室の扉を開いて早々に雄二がCクラス全員に告げます。私はといえば超能力を応用し、認識阻害を行っています。

しかし、どうも漁夫の利は私は好きじゃありませんね。生前……つまり、前世から嫌いというか苦手です。

「私だけど……何か用かしら？」

Cクラス代表小山さん。

……まあ、ここから先は有料です。

「いいや。アンタに用があった訳じゃない。俺たちはそこにいるBクラス代表及び人間の屑である別名根本恭二に用があるだけだ」

「なッ!？」

雄二が不気味に笑います。

Bクラス生徒と、その横には長谷川先生まで。

「なんだ、長谷川先生にBクラスの生徒も居たのか？」

「俺らがどこにしようと俺らの勝手だろ！ 他人のお前にとやかく言われる筋合いはねえ！」

「そうだな……だが、本当にただけなら良いんだが……」
「な、何が言いたいんだ!」

これぞまさに

「じゃあ、これを聞いて貰おうか」

そうして雄二は私が録音した音声を流しました。

『いいか? これからFクラスの馬鹿共がこっちに来て協定を申し込みに来るはずだ。だから俺達はその隙について奴らを討ち取りに行く』

『ふーん。で、私にできることは?』

『特にはない。俺達をこのクラスで隠してくれていればいい。それであっちの馬鹿共が決定的なことを言った瞬間出てくればいいだけだ』

『もしBクラスが負けたら、私達がすぐFクラスに宣戦布告に行くわよ?』

『アイツらが俺達に勝てると思ってるのか?』

『全然』

本物のチェックメイト、ですね。

この音声は盗ちよ——盗さ——盗み聞きしたものです。

「酷いじゃないか? Bクラス代h——失礼、屑。協定を破るなんてな……確かそっちから試召戦争に関する行為を一切禁止にしたんじゃないかったか?」

「くっ……コイツを生かして逃がすな! それにここで討ち取れば

ウチ
Bクラスの勝ちが決まったようなモンだ!」

図星ならではの反応ありがとうございます。

「あれ? 協定違反をしてきたのはそっちなのにそれがばれたら今度は口封じか……どうなんですか? 長谷川先生?」

物的証拠に加え、これまでの一連の会話。

判定をするのは中立的立場にいる長谷川先生と言うことになりますが……

「そ、そうですね。確かに協定違反をしたのはこちらのBクラスのようにですし……」

まあ、こうなるのは確実でしたね。

「……小山さん? 俺たちはそのテープの内容に全く身に覚えがないよな?」

「え、ええ。全く覚えがないわ」

今度ははぐらかすつもりですか。

とことん嫌な人ですね……いや、もう人ですらありませんか。

「それはFクラスの偽造した物何じゃないのかな?」

「残念ながら本物ですね」

「! 音橋絵里!」

「……どこからいたのよ……っていうか、まさかFクラスなの?」

「まず1つ目の質問に対しての答えは最初からですね。そして2つ目の質問に対してはイエスと答えましょうか」

そう言うってから雄二に向き直ります。

「雄二、良いですね？」

「ああ。勝手にしろ」

「……で？　どういう事なんだ？　音橋サン」

屑が話しかけてきます。

仕方ありません。教えてあげましょうか。

「この学園にある監視カメラは私の管轄下にあります。それを捏造するのにはさほど時間はかからないでしょうし、問題はないでしょう」

「な、なら！」

「ですが、この音声は先生立ち会いの下で行った事。捏造する暇なんて一切無いんですよ」

「ッ！」

まあ。

「あなたの考えるようなこと何てたかが知れていますので物的証拠のために取っておいたんですよ。別にさっき認めていれば許す事もしたでしょうに……というわけで」

「は？」

「Fクラスの皆さん。ここにいる根本君と小山さんは付き合っているそうですね。勿論、2人の仲は手作りのお弁当を作り合う仲だそうですね☆」

『『『『『なにいいいいい！！！！？？？』』』』』

『それは本当ですか！？音橋・・・いや！Chief！』

「この情報に嘘偽りは微塵ありません♪」

『殺せええええ！　アイツを殺せええええ！！！！』

「な、なんだコイツら！　戦死を恐れていないのか！？」

『お前らにはわかるまい……独り身の気持ちがああああ！！！！』

『我ら異端審問会の力を見せてやるうううう！！』

『覚悟！　根本恭二いいいい』

『ぎゃああああっ！！！！』

『コイツら怖ええよ！！』

『異端審問会を侮る無かれ』

『我らの目が黒いうちは……』

『何人たりともこの学園でつきあうことは許さん』

阿鼻叫喚。

まさに人間界に住まう物と、地獄に住まう物の戦争。

あまりにもあっさり勝敗がついてしまいます。

流石恨みのパワー。

「そ、そんな……」

「屑は……逃げましたか」

仲間を盾に。

噂以上の下劣な行為に吐き気すら覚え始めます。

「ま、こうなった以上はCクラスも敵だからな。同盟がない以上は連戦になるがBクラス戦のあとにすぐCクラス戦は正直……きついな」

向こうのねらいは寧ろそれ。

保険をかけたつもりなのでしょう。

「それならこれからどうするんです？」

「大丈夫だ」

「へ？」

雄二の自信ありげな声と即答されたことに変な声が出てしまいます。
まさか良い案でも？

「明日の朝に実行する。目には目を、だ。分かってるな？」

……納得。

「了解です」

「じゃあこのことを俺は明久達に教えとく。お前は徹底的に調べ上げろ」

「この2つ名にかけて」

翌日

「よし、昨日言ってた作戦を実行する」

「作戦？　でも、開戦時刻はまだだよ？」

開戦予定時刻は午前9時。

そして、只今の時刻は午前8時30と30分のずれがあります。
まあ、ちょっと早いですけど……考えてることくらいは分かります。

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

「あ、なるほど。それでどうするの？」

「秀吉にコレを着て貰う」

雄二が鞆から引きずり出したのは我が文月学園の女子の制服です。
あえてどこから入手したかは聞かないでおきましょう。

「それは別に構わんが、わしが女装してどうするんじゃ？」

秀吉は男の子なんですから少し構って下さい。

というか本当に男の子ですね？ 最近本当は……って思ってきて
ますよ？

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう」

バカとテストと召喚獣を読んでいる人なら分かりますね。

秀吉の双子の姉である木下優子さん。

2人は二卵性の双子であるにもかかわらず、一卵性の双子のように
そっくりなのです。

秀吉は演劇に長けているのですが勉強は不得意。

木下優子さんは勉強に長けているのですが歌が不得意。

……そして腐女子、といったところでしよう。

「そして音橋」

「？ なんですか？」

「お前には万が一の場合として、姿を消すかなんかして秀吉のそば

にいてやってくれ」

「はあ、それくらいならいいですが……」

「じゃあ、着替えるとするかのう」

面倒ではありますが些か仕方ないでしょう。

というか秀吉？ 此処で着替えるとかあなたには羞恥心がないんですか？

「っ……………（ブシャアアア！）」

凄い勢いで鼻血が出ています。

康太、シャッターがすり切れますよ。

「我が、人、生に……………いっぺん、の悔、い無し…………」

「はいはい」

「？ なんじゃ？」

「秀吉はこっちで着替えましょうね？」

「？ なぜじゃ？」

秀吉は裏も闇も理解していないんですね…………仕方ありません。

「（秀吉？ あなたの着替え姿が、裏で500円ほどで取引されても良いんですか？）」

「…………うむ、そっちで着替ようかのう」

取りあえずこれで良いでしょう。

後は康太のカメラからSDカードを抜いて…………これで良いでしょう。

「こんなもんかのう？」

流石は演劇部のホープ。

着替えはお手の物といった所でしょうか。

「それじゃあさっさと済ませちゃいましょうか」

「うむ」

廊下を少し小走りし、Cクラス前で1度止まります。

「すまないがここからは秀吉だけで行ってくれ。正確には音橋もだけれどな」

「うむ」

「了解しています。まあ、秀吉に限ってそんなへまはしないと思いますけどね」

「確かにな」

それにしても本当に女性生徒服が似合ってますね、秀吉。

「とりあえずCクラスを挑発してAクラスに敵意を向けてくれ。戦争の準備が出来ていると言っても言ってな。ただし宣戦布告はするなよ」

「了解じゃ」

「それじゃあ行きますよ?」

「うむ」

秀吉は深呼吸をして、Cクラスの教室に入ります。

「静かになさい、この薄汚い豚共!」

.....!?

「な、何よあんだ!」

ひ、秀吉!?

木下優子さんはそういうキャラじゃ……というかそれはそれで可笑しくないですか!?

「話しかけないで! 豚臭いわ!」

この上ない罵倒ですね!?

確かに敵意を向けろと入ってましたけど!

「アンタ、Aクラスの木下ね? ちょっと点数が高いからっていい気になるんじゃないわよ! 何の用よ!」

「ふん。私たちはね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの! あなた達なんて豚小屋で充分だわ!」

「なっ! 言うに事欠いて私たちにはFクラスがお似合いですって!?!」

ちょっと待って下さい。

小山さんの脳内では豚小屋⇨Fクラスの方程式が既に成り立っているんですか?

確かに気持ちは分かりますが……複雑な心境ですね……

「ふん。あなた達程度はFクラスですらもったいないわ! せいぜいグラウンドか屋上がお似合いよ!」

秀吉、壊れてませんよね?

「手が汚れてしまうから本当はイヤだけど、特別に今回はあなた達をふさわしい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしているようだし覚悟しておきなさい。近いうちに私たち

が薄汚いあなた達を始末してあげるから！」

そう言ってから教室を出ます。

「これで良かったかのう？」

どこかすっきりした秀吉の表情からして……良いストレス発散になったみたいですね。

「ああ、すばらしい仕事だった」

そう言っているとCクラスから『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備をするわよ！』という、小山さんの声が聞こえてきました。ヒステリックというか、独裁者みたいな声ですね。

「じゃあ作戦もうまくいったことだし俺たちもBクラス戦の準備を始めるぞ！」

「そうですね。行きましようか」

腕時計を見ると開戦時刻10分前です。私たちは走って教室に戻ることとなりました。

第4話「双子」(後書き)

「「「「「遅い」「」「」」

えっと……何がでございましょうか

「私達オリキャラの登場が遅い」

「見せ場がない」

「暇だわ」

「早く出して頂きたいわ」

「怒るかなー」

「僕としても早く……」

オリキャラ諸君、もう少し待つんだ。
さすれば汝らに出番は与えられん。

「「「「「何様だッ!?!」「」「」「」」

創造主Xだッ!

第5話「オペレーション……なんだっけ」

「ドアと壁をうまく使うんじゃない！ 戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が廊下に響きます。

つい先ほどから試召戦争が開戦されました。

我がFクラス代表からの命令は『敵を教室に閉じこめろ』との事です。

………なのですが、瑞希が全く戦線に参加しません。

今のところは何とか秀吉と私で戦線を保っていますが………

少々厄介、というか、キツイですね。

「勝負は極力単教科で選んで下さい！ 補給も念入りに行って下さい！」

そうでもないかと死にますから。

「1対1ではなく、一対多で挑むのじゃ！」

的確な指示ではありますが……このままの状態だといつ崩れるか……

「左側出入り口、押し戻されつつあります！」

「……………」

「古典の戦力が足りねえ！ 援軍を頼む！」

押し戻された左出入り口から見えてきたのは古典の竹内先生ですね。
ああ、竹内先生……………」

竹内先生 イイイイ！?!?!?!?!

まずいですね……………Bクラスは文系が大半だったはず。
教科が入れ替えられると一気に戦況が覆されるでしょう。

「姫路さん！ 左側に援護を！」

明久からの指示です。
ですがそれでも瑞希は……………」

「え、えつと……………その……………」

……………動きませんか。
仕方ありませんね……………」

「明久……………作戦名『HAGE』を実行しますよ」

「了解！ うおりやああああ！」

私の指示を聞いて人混みの中に突進していく明久。
そしてそのまま左側出入り口で立会人を行っている竹中先生の耳元
で何かを呟きます。

「っ!?!」

直後、竹内先生が頭を押さえます。

……正確にはカツラをですが。

これぞ私、情報のファルコンが仕入れた情報。

名付けて《煉獄帳》

生徒だけではなく、教師や地域の方々の個人情報満載のある意味呪われた手帳。

トラウマも数多く記載されており、それを目にすることは私以外には叶わないでしょう。

「明久はそのまま指揮官になって下さい！」

「了解！ 古典の点数が残っている人は左側出入り口へ！ 消耗した人は補給に回って！」

さて、と……………

「瑞希」

「は、はい……」

「どうかしたんですか？ ちょっと……………おかしすぎます」

瑞希の取っている行動。

それは馬鹿な明久にも分かる、おかしい行動。

ただ唯一願うのは、私の憶測が外れていること。
ただそれのみ。

「そ、その、なんでもないです！」

……本当に、昔から嘘が下手ですね……

「そうは見えないですよ？ 何かあったなら話して下さい。その返答次第では作戦を一時変更します」

「ほ、本当に何でもないんです！」

涙目ですね。はい分かります。

「報告します！ 右出入り口側が現代国語に変更しました！」

「なっ……数学教師はどうしたんだ！？」

「それが、Bクラス内に拉致されて模様！」

右側でも動き有りますか……しかもまた文系。

Bクラスも本格的に動き出しましたね。

「私が行きます！」

「瑞希……！」

瑞希が漸く重い腰を上げたと思った矢先。

「あ……」

言葉をそれきり失い、俯いてしまいます。

瑞希の見た方向。

その先にいる人物の手に握られているのは、淡いピンク色の可愛らしい便せん。

「……やっぱり、そういうことですか」

前に瑞希が探していた便せん。

誰かに拾われてなければいいと思っていましたが……………

嗚呼、これでつかえていた部分が取れましたね。

全ては昨日の協定の話——…いえ、もしくはそのずっと前から、瑞希が無力化するのが分かっていたから……？

それなら理解は出来ます。

瑞希が参加できないのが分かっているならあの協定はBクラスにとっては圧倒的有利なもの。

自分のために人の恋心を弄び、さらには私たちを突き落とそうしたり……彼女のクラスを利用したり。

腹が立つのは、あの屑と。

そして、今回のことに気づけなかった自分です。

「……瑞希」

「は、はい……」

「具合が悪いなら悪いと言って下さい。あんまり戦線に加わらないで下さいね。Aクラス戦もあるんですから体調管理はしっかり行って下さいよ？」

「……………はい」

「あ、あと私は用がありますので、ここはよろしくお願いしますね？」

「えっ？」

瑞希ににこりと微笑む。

「大丈夫。私も指示を出すなどとは言いません。ただ普通の会話の中に、含めば良いだけですから」

「っ……絵里ちゃん、まさか知って」

「しー……気付かれますよ?」

「……………ありがとうございます」

「瑞希、お願いできますか?」

「……はいっ!」

そう言ってくれた瑞希の側を離れ、私は走ります。

「本当に面白い事をしてくれましたね……屑のやりそうなことではありますが」

———本当に原作どおり———

でも、私はそれを阻止できなかった……いえ、阻止させないために神様が仕組んだのかもしれないね。

何故なら、私はイレギュラーだから。

明久達はちゃんとした物語の住人達。

でも、そんな私でも楽しいと思えたこの世界……だから私は友達の不幸をちゃんと幸せにしてみせる!

…前の世界とは

違うのだから。

[illegible]

「ん？ 何だ、音橋？」

私は真剣な表情をしていた御陰か、雄二は話を聞いてくれました。ついでに後ろには引っ張って連れてきた明久がいましたが。

「そうか……姫路が使えないなら、しょうがないか……」

「……明久の脳内レベルのことを忘れていました。明久にわかりやすく説明すると、瑞希が脅されてるって事です。」

85

「それを救うためには明久がその役回りをしなくてはなりません」
「……」

「ですから、お願いします!」

私は明久の手を取ってちゃんと目を見据えて話します。

「俺と音橋は脅されている姫路を戦わせたくないと思ってる。俺は鬼じゃないからな。どうだ、やってくれるか?」

「……痛そうだけど、姫路さんのためにも頑張ってみるよ!」

「ほ、本当ですか!」

ぱちん!

明久が自分の頬を叩いてピースをしてくれます。

流石明久。

住人なだけがあります。

「ありがとうございます……それじゃあ作戦開始ですね」

「ああ」

「うん」

「明久! 細かいところは明久に任せますが、タイミングを見計らって出てきて下さいよ!」

「うまくやれよ、明久」

そう言って、私と雄二は教室を後にします。

「雄二……その……」

「ああ。Dクラスに指示を送ったらすぐに補給の終わった奴を送る。最悪の場合は引けよ?」

「お待たせしました！ 私が引き受けます！」

Bクラスの出入り口に付いた私は大きな声で、みんなに告げます。

「来たぞ！ 音橋だ！」

「うっしやあああああ！ Bクラスの奴らを蹴散らしてくれ！」

テンションがますますあがっていきます。

「くっ……アンタなんて返り討ちにしてやるっ！ 試験召喚！」

「俺もやってやる！ 試験召喚！」

「この人数ならいくら音橋でも倒せるだろう！ 試験召喚！」

3人が私に襲いかかってきます。

ですが……………

「手加減なんてしませんよ？ 試験召喚！」

幾何学的な魔法陣からでてる、制服に小さな楯を付けて日本刀を持った私の召喚獣。これまた腕輪を着けています。

「失礼致します」

私は無造作に日本刀をふるい、3人の召喚獣を一気に片付けます。

『Fクラス 音橋絵里 VS Bクラス生徒×3

現代国語 5000点 VS 合計 436点

』

「「「はあ？」」」

3人から唾然とした声が出ます。

「っ、強いぞ！」

いやー……それほどでもあります。

「ここにいる奴ら全員の点数を足してもとどかないぞ！」

早めに片づけて下さいよ、明久。

するとDクラス側の壁からドン！ と何かで叩かれているような音がします。

この辺で明久の所に援護しにでも行きますか。

「この程度なら私が出るまでもありませんね。皆さん、後は任せましたよ」

『『『『がつてんでいっ！！！！』』』』

私は人混みに紛れ、途中で身を低くして瞬間移動テレポートをします。

「っ！ 絵里！」

「明久、少しどいて下さい。」

「あ、うん」

私は残りの力を使って壁の強度を下げます。

今日は大量の人に精神感応テレパシーを使ったので、さすがに念動力サイコキネシスで壁を壊す事はできませんからね。

「ふう……これで、Eクラスなみの強度になったはずです！」
「本当！？　じゃあ行くぞ……」

再び、明久が壁を破ろうとします。後2，3発って所ですね。

『お前ら、いい加減にあきらめろよな。昨日から教室の出入り口に集まりやがって……暑苦しいことこの上ないっての』

不意に、根本の声が聞こえてきます。

『どうしたんだ？　そろそろギブアップするのか？　屑野郎』

明久が壁を破るまで、後2発……

『はあ？　ギブアップすんのはそっちだろ？』

『それは、無用な心配だな』

ドンッ！

残り1発………

『そうかあ？　そっちは、切り札の姫路さんが調子わりいみてえじやねえか』

『そうだな。確かに、姫路は体調が悪くなっていたようなので休んで貰ってはいるが、この程度のクラスに出す必要もないだろ』

『負け犬の遠吠えって奴か？　坂本？』

『負け犬？　ああ、お前らのことか？』

明久が深呼吸をして力をためます。

次で、終わりなのですから。

『さっきからドンドンドンドンと壁がうるせえな。何かやっているのか?』

『さあ? 人望のないあんたへの嫌がらせじゃないのか?』

『けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ!』

………さあ、いよいよ開幕です。

「……体勢を立て直すぞ! 一旦下がれ!」

そう言うとき少しづつ下がっていくFクラスの皆さんの足音が聞こえてきました。

流石に被害を受けるわけにはいきませんね。

『どうした? 散々、コケにしておきながら逃げるのか?』

「今です、明久!」

「うおおおりやあああ!!!」

ドゴォッ

まるで私の指示を待ち望んでいたかのように、召喚獣は壁に突っ込んでいきます。

直後、大きな音を立ててDクラスとBクラスをつなぐ1つの道が出現しました。

この道は私たちFクラスの勝利の道と言っても過言ではないでしょ

う。

「なっ!？」

驚いて引きつった、クズ………もとい、根本君の顔。

大体の戦力はこっちに引きつけてあるので、根本君の懐はがら空きです。またとない決闘の場所ですね。代表の防備も薄いですし……

「くたばれ! 根本恭二、もといクズがあー!」

明久を含めた数名が、根本君に勝負を挑むために接近していきます。

「遠藤先生! Fクラス島田美波が――」

「Bクラスの山本が受けます! 試験召喚^{サモン}!」

「くっ! 近衛部隊か!」

まだ教室に残っていた根本君の近衛部隊が明久達の行く手をふさぎます。

明久達と根本君の距離は約20メートル程度。広い教室のせいで随分と距離があります。Fクラスの教室とは大違いですね。

「は、ははっ! 驚かせやがって! 残念だったな! お前らの奇襲は失敗だ!」

勝ち誇ったかのように笑う根本君。

確かに明久達の奇襲は失敗です。既に周りを近衛部隊に取り囲まれています。

まあ、作戦どおりですが。

中学生になってみるとわかりますが・・・教科ごとに担当教師が違
うんです。

数学の木内先生は採点が早く、テストを早めに返してもらえます。

世界史の田中先生は点数の付け方が甘くて、点数が本当の点数より
も高いことがしばしば。

今ここにいる英語の遠藤先生は、多少のことであれば寛容で見逃し
てくれ、○を付けてくれる等々。

では保健体育は？

康太が成績の半分以上を締めている保健体育の教師は、採点が早い
わけでも点数を付けるのが甘いわけでも、寛容で見逃してもくれま
せん。ましてや、召喚フィールドが広くなったり特別な物になるこ
ともなんです。保健体育の先生は、体育教師であるが故の――

ダン、ダンッ！

出入り口は人で埋め尽くされ、私たちが事前にこわしておいた室外
機のおかげでエアコンが動きません。少しでも涼しさを求めるため
に大きく開かれた窓……そこからロープを使い屋上からやってきた
2人分の影。

そう。保健体育の先生の利点は、体育教師であるが為の――並はず
れた行動力。

そして、勿論クズにとどめを刺すのは……

「……………Fクラス、土屋康太」

「き、きさま！」

「……………Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムッツリイーニーーッ！」

これで、終わりですね。

「……………^{サモン}試験召喚」

『Fクラス 土屋康太 VS Bクラス 根本恭二

保健体育 441点 VS 203点

』

ムッツリ二の召喚獣は手にした小太刀を一閃して、一撃で敵を倒します。

只今、この時刻をもってBクラス戦はFクラスの勝利という形で幕を下ろしました。

第5話「オペレーション……なんだっけ」(後書き)

サブタイトルの意味？

そんなの知るか！　バーカ！　バーかぶらっはっ！？

「お騒がせ致しました」

ちよ……絵里……みぞおおおち……

「みぞおおおちと言う部分は身体にはありませんのでご安心を」

ぐふっ……

「あ、死んだ……ではまた次回、宜しくお願いします」

死んでねええええ……

第6話「終戦と女装と2人の乙女」

戦争終了後。

今は明久の手に冷却シップと包帯を巻いている真つ最中です。

「それにしても、お主らは思い切った行動に出たのう」

うつ……

あ、あの時は冷静じゃなかったからあんな判断をしてしまったんです……

情けない。

「うつ……痛い、痛いよう……」

「明久あんまり動かないで下さい。うまく冷却湿布が貼れないじゃないですか」

全部が全部フィードバックするわけではないのですが……素手で鉄筋コンクリートを砕こうとしたあげく、その後少しばかり耐久力が高い板を割ったとなれば話は別です。

恐らくとても痛いんでしょうね。

「それにしても絵里がこんな作戦に出るとはのう……その作戦を実際にやった、明久も明久じゃが」

「しょ、しょうがないじゃないですか……冷静になれなくてそれく

らしいか方法がないと思ったんですから」

「今少し後悔してるよ……………痛っ！」

「あ。すみません」

「壁を壊すなんて後先を考えていなかったじゃろ。まったくもって明久のような大胆な作戦じゃのう」

「秀吉…………それは、褒めてるんですか？　それとも貶^{けな}しているんですか？」

「あれ？　僕バカにされてないかな？」

まあ確かに壁を壊すのはまずかったですかね…………

明久にはあとでお詫びの品を持って行きましようか。

「今回ののは計算外だったからな。そこが明久の強みとも言えるんだが」

バカが強み、ということですよ。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか——な、負け犬の群れの代表さん？」

「……………」

床に座り込んでいるのは根本屑。

先ほどまでの態度がまるで嘘のようですね。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが……………特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言にざわざわと周囲のみんなが騒ぎ始めます。

まあ当然のことですね。

「落ち着いて下さい皆さん。前にも言いましたが私たちの目標はAクラスです。ここが最終目標というわけではありません」

「確かにそれもそうね」

「音橋の言う通りここはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件をのめば解放してやろうかと思う」

2回目という事もあったか皆さん納得していますね。

「……条件は何だ」

呟くように根本君が問いかけてきます。

……ふふっ。本当に面白いことを言いますね、この屑は。

「条件？ それはお前だよ負け犬代表さん」

「俺だと……？」

「ああ……お前にはさんざん好きかってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

根本君は本当に酷いことをしていますからね。

その証拠に周りの人たちはフォローしませんし、本人も分かっているようですしね。

「そこでお前らBクラスに特別チャンスだ」

さて、と

「Aクラスに行って試召戦争の準備が出来ていると宣言してこい。そうすれば今回は特別に設備についてのことは見逃してやっても良い……ただし、宣戦布告はするなよ。すると戦争は避けられないかな。あくまでも戦争の意志と準備があるただけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

「ああ。あとはBクラス代表さんが音橋の言うとおりに行動してくれたら見逃そう」

ええ。勿論私が雄二に頼みました。

「どうもお久しぶりです根本屑二君」

「恭二だ……それで、何をすればいい？」

「私としては今回のこと、“怒って”いるんです……なので」

私は、カバンに入れていた女子の制服を取り出します。

「Bクラス代表さんにはコレをきてAクラスに伝令して貰おうと思います♪ 尚、これが出来なかった場合は生まれたときから今までの恥ずかしかった過去ベスト50を校内放送で流します♪」

そう告げると、FクラスBクラス問わずに顔が引きつります。

私の情報網に穴はありませんからね。

「ば、バカなこと言うな！ この俺がそんなふざけたことを……！」

慌てて言う根本君。

確かに男の子として女装は遠慮したいですね……

『Bクラスの生徒全員の力で必ず実行させてみせよう！』

『任せてちょうだい！ 必ずやらせるから！』

『ああ……こんな簡単なことで設備をゆるしてくれるなんて、慈悲深いんだ！』

『それだけで教室の設備を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラス生徒全員からの暖かな声援。

良かったですね！

「では決定ですね」

「くっ！？ よ、寄るな！ 変態どぐふう！」

「とりあえず黙らせました！」

「……ふえ？ あ、はい、ご苦労様です？」

一瞬で根本君の鳩尾に一発入れた男子生徒。
変わり身早くないですか……？

「では着付けに移るとしましょうか……えっと、誰か手伝って下さい」

「あ、私手伝います」

「じゃあ、私も」

ぐったりとしている根本君に近づいて制服を脱がせます。

………はつきり言って気持ち悪いです。

「ううう……」

……このままだと起きますかね……？

「ちょっと離れていて下さい」

「「あ、うん」」

バチィッ！！ ↑スタンガン

「うぐあ！？」

スタンガンを押し当てて一発入れておきました。
さてと……女子制服を宛つてと

「これは……さすがに難しいですね……」

「土台が腐ってるから可愛くするのも難しそうね」

「とりあえず着替えさせましょう」

私を含める女子3人で吐き気を我慢しつつ着替えさせます。

良し。

お着替え完了です♪

「ふう……………」

「あいつに制服着せたのは良いが……これからどうする？」

「そうですね……煉獄帳にのるような事をさせたいので、あの格好で撮影会でもしておいて下さい。あとこの制服どうしましょう」

「ん？ それなら、俺が処分しておいてやる」

「そうですか？ じゃあお願いします」

雄二に制服を渡します。制服の行き先は恐らく焼却処分か転売ですね。

哀れ根本君は学校から家まで女子制服のすばらしさを堪能することでしょうね。

……………さてと。

「よいしょっ！」

体力というかもうこれ以上使うと本当に危ういので最後のテレポーターを行います。

私はポケットから、根本君の制服より押収した手紙を取り出します。

瑞希の席は……………ここですね。

鞆を開けて手紙を入れます。

これでまた何事もな——

「絵里ちゃん！」

「ひゃいっ！」

背後から聞こえた大きな声。

それはとても聞き慣れた声です。

「み、瑞希……………？」

後ろを振り向くとそこにいたのはこの手紙の張本人である瑞希でした。

「絵里ちゃん……………」

……………どうやら今日は瑞希の泣き顔ばかりを見る日ですね……………

「どうしたんですか？」

……まさか私が瑞希の鞆を漁っていたから泣いているとか……？
そんな考えがふと頭を過ぎります。

しかし、そんな考えとは裏腹に。
私の身体に來た柔らかない衝撃。

「……ふえ？ 瑞希……？」

「あ、ありがとうございます……わ、私、ずっと、どうしていいか、わかんなくて……」

……はあ。

「瑞希、取りあえず涙を流すのは止めましょう。瑞希が泣いているのを見られると私が怒られるので」

「は、はい……」

瑞希を数分かけて落ち着かせます。
すると瑞希は離れていきました。

腕の中に未だに残るぬくもりが少しずつ冷えていきます。

「いきなりすいません……」

目尻の涙を少し拭う瑞希。

「良いんですよ……それだけ焦ってパニックになっていたと言うことでしょう？」

「はい……」

「なら良いんです。大丈夫ですよ……さて。みんなの所に戻りましょうか」

「ま、待って下さい！」

ある程度平常を保てるようになったと判断し離れようとする、瑞希が私の制服の裾を掴んでそれを阻止します。

「何ですか？ 瑞希？」

……まさか今度こそ鞆のことでしょうか……

「あの……」

「な、なんですか？」

「手紙、有難うございました」

思いがけない言葉に一瞬処理落ちしかけますが、直ぐさまに平常心を保ちます。

「何のことですか？ 私は根本君の制服から瑞希の手紙がでてきたから……戻ただけですよ？」

「それって嘘ですよね？」

即答しないで欲しいです。

「……さあ。どうでしょうか？」

取りあえずこの場はお茶を濁すこととしましょう。

「……………やっぱ、絵里ちゃんは優しいです……今回の試召戦争

で、音橋が怒ったところ始めてみたかもなつて坂本君が言っていました。それにわざわざ作戦を変更してもらったり、私の抜けた分だけ頑張ってくれてたり……」

「じよ、冗談が過ぎますよ？ 私が怒っていたのは……その……べ、別の理由です」

「ごまかしても駄目です。声が裏返ってますよ？」

……なんか、凄く恥ずかしいです……

「……………まあ、そうですね。私は人が窮地に立たされると手をさしのべなきゃ気が収まらない性分みたいですし」

そのせいで前世は死んでしまったような物だけでも。

「性分、ですか？」

「はい。特に大切な人が傷ついていると……もう凄いことになっちゃいますよ？」

「大切な人ですか……？」

瑞希の問いかけに私はゆっくりと名前を読み上げることにした。

「瑞希は勿論、雄二やバ——明久。秀吉に康太に美波にFクラスのみんなも」

「今吉井君のことバカって言いかけませんでした？」

「気のせいですよ？」

「……でも、凄く嬉しいです。絵里ちゃんはいつでもみんなに優しく、そんなところが昔から変わっていないくて……」

……な、何かさっきよりも断然と恥ずかしさが増しているのは気のせいですか？

うううう……顔、今絶対に赤いでしょうね……

仕方ありません。

「そ、その手紙、うまくいくと良いですね」

強引に話題を変えることにしましょう。

「あ……はい！ 頑張ります！」

そして、瑞希の笑顔。

そこでふと思ったことをいつてみることにした。

「……人って難しいんですよ？」

「え？」

「……人の考えていることはその人にしかわかりませんし、その考えを伝えるまでには勇気を持っていったりしなきゃいけません。でも人間って唯一言葉を使って自分の気持ちを事細かく伝えられると思うんです。言葉は時に人を傷つけるかもしれませんが、時に褒めたりうれしさを共感したりすることが出来ると思うんです」

「……なんだか絵里ちゃんは凄いです」

「え？」

「私の知らないことばかり知っていたり、勇気があって。何よりみんなに優しいから羨ましいです」

「………私は、そんなに偉くないですよ………」

「？ 何か言いましたか？」

「い、いいえ！ 何にも！」

そんなことを話していると廊下から話し声が聞こえてきました。

『こ、この服、やけにスカートが短いぞ!』

『いいからキリキリ歩け!』

『さ、坂本に音橋め! よくも俺にこんなことを――』

『無駄口を叩くな! これから撮影会もあるんだから時間がないんだぞ!』

『そ、そんなこと聞いてないぞ!』

ふむ。

「なんででしょうか?」

「さ、さあ……ぷっ……」

思わず吹き出しそうになるのをこらえます。

どうやら宣戦布告は終わって撮影会のようなですね。

「とにかく、瑞希のこと応援してますから!」

「はい! 私も絵里ちゃんのこと応援します!」

「っ!? そ、そんな応援じゃないです!」

最後にとんでもない爆弾発言をして瑞希は走って行ってしまいました。

さて……

根本君のトラウマを記載するために煉獄帳を携えて行くとしましよう。

フッフ……逃れられると思ったら大間違いです。

まあ、見ていなくてもカメラからの監視映像とかがあるんですけど
ね☆

第6話「終戦と女装と2人の乙女」(後書き)

「さく、来週のBTSは？」

「吉井明久です。」

来週は前のやつを知っている人なら分かるよね？
そう、アイツ
がやってくる前触れが見られるよ！

それじゃあ来週もおったのしみにいいいい！！」

第7話「カードは揃い始める」

P r r r r ! ! P r r r r ! !

ピッ

「はい、もしもし」

“あ、絵里？ 元気にしてるかしら〜？”

「お母さん……！？」

“お父さんもいるぞ”

「お父さんまで……」

テレビ電話にこれでもかと言うほど映ってくる2人の男女。

女性は私の母親である、音橋ユエ。

銀髪のロングストレートで、私と同じ緑色の瞳をしています。

対して男性は私の父親である、おと音橋陽。

青色がかった髪で、碧眼です。

2人ともいつも海外にいて仕事に励んでいます。

まあ仕事内容とかは、知っては行けないような気がするので知りませんけど……

「で、何か用事でも？」

“いや、特にないわ。まあ強いて言うなら”
“変なウジ虫野郎がついていないか心配だったから電話したただだよ”

……この、親バカが……ッ！

「まあ大丈夫ですよ……」

“絵里？ 最近はどう？ 学校の様子は？”

「ああ……えーっと——」

最近起こったことと必要なことを伝える。
試召戦争の事とか、その他諸々。

「——とかですね」

“あらあら……”

“興味深いな……だが、怪我だけはしないでくれよ？”

「はいはい。そっちは？」

“あ？ あー、今は『音橋隊長ッ！ 書類を片づけて下さいよッ！』
うっせえっ!!”

………

“後の事は母さんに聞いておいてくれ。じゃあな”

「あー、はい」

お父さんが見えなくなった後、お母さんが口を開く。

「で、お母さんはどこにいるの？」

“今回はイギリスにいるのよ？ 紅茶が美味しいわ”

「イギリス」

“ええ。今度お土産送るわね”

「楽しみにしてますね」

“ええ。それじゃあ切るわね……あ、それともう1つ”

?

“もう少しで多分転校生が来るだろうから、楽しみにね？”

「は？ え、それってどういう——」

“じゃあね”

ブ
ツ
ツ
…

「……切れた」

全く……どういふ事なんでしょうか……

まあお土産は楽しみですけど。

後日送られてきたのは絵はがきとティーセットと紅茶のセットと短刀だった。

[illegible]

そして点数補給を終えた2日後の朝……

いよいよAクラス戦を残すのみとなった私達は、あと少しでお別れをする予定のFクラスで最後の作戦の説明をしていました。

「まずはみんなに礼を言う。周りのやつらに不可能だと言われているにも関わらずここまで戦い抜いて来れたのは、他でもないみんなの協力があつてのことだ。感謝している」

……雄二が礼をした……!?! ゆ、夢ですか? これは……

……でも確かに今日という日までの戦いは夢ではありません。ここにいる、Fクラスみんなが居たからこそ出来たことです。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

今の雄二の発言に急に動揺した明久が尋ねます。

まあ、雄二の本性を知っている人なら、誰しもが思うことですね。

「ああ。自分でもそう思う。だがこれが本当の俺の気持ちだ。ここまで来たからには絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を教師どもに突きつけるんだ!」

『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

『『『『『勉強だけじゃねえんだーっ!』』』』』』』』』』』

最期の戦いを前に皆さんの士気が上がっていきます。

私と言えばお茶を飲んだり写真を撮ったりですかね……

雄二の写真とか、明久の写真とか、よく売れるんですね。

「みんなありがとう。それで残るAクラス戦だが……これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

その言葉にクラス全体がざわつき始めます。

まあ説明は受けていますからなんとなく納得は出来ますが……

本当に、大丈夫でしょうか……

「どうのことだ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

机を叩いて教室のざわめきを止める雄二。

「やるのは当然音橋と翔子と行きたいところだが………俺と翔子だ」

私が代表なら兎も角。

クラスの代表と代表が闘うのが正当でしょうしね。

「絵里なら分かるけど、アホで馬鹿の雄二に勝てるわけなああつ！
！！」

雄二が明久の頬にカッターを投げ、そのまま壁に突き刺さったカッ

ターを明久の耳に持っています。

「次は耳だ」

「いえ、殺すつもりなら一気に首でしょう」

「すいませんでしたアッ!!」

最近若干汚染されてきてますね、私も。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない……だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかったからな」

まともなやり方で勝てるクラスなんてFクラスにはありませんからね。

その名の通り当たって砕けろ……いえ、当たって砕けた状態になること間違いなしですね。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ってFクラスはAクラスの設備を手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

今まで勝てないと思われていた戦いを勝たせてきた雄二。

そんな雄二の言葉を信じないクラスメイトはもういないでしょうね。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今みんなに見せてやる！」

『『『『おおおーっ!!』』』』』

「さて、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定す

るつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は限定する。レベルは小学生レベルで100点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

小学生レベルなら2人とも満点確実だと思っうんですけど……

「でも同点だったらきつと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、少し雄二に厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

明久でも解けそうですよね。小学生レベルですし。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ 明久ほどバカじゃないからな。そこまで運に頼りきったやり方を作戦とまでは呼ばない」

「???? それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」

まずは自分がバカと言われたことに突っ込んで欲しかったですね。

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくても小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

霧島さんほどにもなれば集中力を見だしたところで点数は変わらないでしょう。

「雄二、あまりもったいぶるでない。そろそろタネを明かしてもいいじゃろう？」

クラスの皆も秀吉の言葉にうなずきます。確かに私も気になります

ね。

「ああすまない。つい前置きが長くなった」

今までの言っていたことをもとに考えて、最も近そうな答えは――

「俺がこのやり方を提案した理由は1つ。それは、「ある問題が出れば、霧島さんは必ず間違えると知っているからですか？」……その通りだ」

雄二の声に合わせるようにして言ってみます。まあ、これならある程度は説明が付きますね。

「音橋の言った通り、俺はアイツが必ず間違えると知っている。そしてその問題は――大化の改新」

「大化の改新？ 誰が何をしたのか説明しろ、とか？ そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと――何年に起きた、とかかのう？」

「おっ。ビンゴだ秀吉。お前の言う通り、その年号を問う問題が出たら俺達の勝ちだ」

大化の改新の年号ですか。

645年ですね。

覚え方としては――無事故（645）の改新。または一蒸し米（645）炊いて大化の改新とかですね。

……明久は分かっていますよね？

（明久、ちゃんと分かっているんですか？）

念のためと言うことで聞いてみます。

（もちろんだよ。鳴くよ（794）ウグイス、大化の改新って覚えてるもんね）

……可哀想な明久……

794年は、鳴くよウグイス平安京です。

794年……延暦13年に桓武天皇により定められた日本の首都で、平安城とも言い、現在の京都市中心部に位置しました。1869年、明治2年に政府が東京に移転して実質的には首都機能を失いましたが、その位置づけについては争いがある、とまで言われています。

因みに平城京は710年ですね。

2つ揃えて覚えると良いでしょう。

「大化の改新が起きたのは645。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

途端に私とみんなから目を逸らす明久。

「だが、翔子は間違える。これは確実な情報だ。そうしたら俺達の勝ち。この教室とはおさらばってワケだ」

これが雄二の作戦。

ですがその問題が出なければ行けないのですから……結局の所運次第じゃないですか。

「あの、坂本君」

「ん？　なんだ姫路？」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

ああ、そう言えばしばらく前から呼び捨てにしていますね。

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ！？　なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ男の敵！　Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

Fクラス男子全員が両手に上履きを抱えながら、顔はもの凄い形相。端から見るとやっぱりバカの集団ですね。

「遺言はそれだけか？　……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

いつの間にか隊長になっている明久。そんなに羨ましいんですかね……？

するとトントんと肩を叩かれました。振り返ると瑞希が。

「あの、絵里ちゃん」

「なんですか？　瑞希」

「吉井君も霧島さんが好みなんでしょうか？」

「どうでしょうね……？　推測ですが、霧島さんは美人でスタイルも良いですし才色兼備って聞きますから……明久の趣味に近いんじゃないんですか？」

「……………」

「えっと、なんで瑞希は明久に攻撃態勢を取ってるんですか！？　美波もなんで明久に向かって教卓なんてものを投げようとしてるん

ですか!？」

後で攻められるのは私です。

「まあまあ。落ち着くんじゃみんな」

手を叩いてみんなを沈める秀吉。

秀吉が神々しいですね。

「む。秀吉は雄二が憎くないの？」

「冷静になって考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ？
男である雄二に興味があるとは思えんじやろうが」

？

「むしろ、興味があるとすればじゃ……」

「……そうだね」

すると明久達の視線が瑞希に向けられたあと、私にも向けられます。
……？ 何故か悪寒が……

「な、なんですか？ もしかして私、何かしましたか？」

「なにか悪寒がするので……気のせいだと言って下さい……」

慌てている瑞希と悪寒がする私……

このほかの共通点が私たちが女であること……まさか……!？
い、いえ、ありません。あの霧島さんがまさか……

「とにかく俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えて
いたんだ。アイツは1度教えたことは忘れない。だから今、学年ト

ツプの座にいる」

そうですか。

霧島さんは一度覚えたことは絶対に忘れない。

けれど、今回はそれが仇となると言うわけですか。

………まあ私も1度覚えたことは忘れないようにしてもらってるんですけど。

その方が何かと便利ですし。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は——」

『『『『システムデスクだ!』』』』

これからFクラスの勝利への階段が始まりました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

今回は代表である雄二を筆頭に私、明久、瑞希、秀吉に康太と美波と主要メンバー勢揃いでAクラスに来ていました。

「うーん、何が狙いなのか？」

現在私達と交渉のテーブルについているのは秀吉の双子のお姉さん。初対面の私には見分けることはかなり困難かと思われまふ。

……性格とかは分かるんですけど。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

悪魔のような笑みで宣言するのは雄二です。

まあ、木下さん……優子さんが怪しむのも無理はないでしょう。下位クラスに位置している私達が学年トップである霧島さんに一騎討ちで挑もうというのですから……普通は何か裏があるのでと考えます。考えない人がいるのなら見てみたいですね。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね。だからといってわざわざリスクを犯す必要もないかな」

「賢明だな」

予想通りの返答ですね……しかし、私が暇です。

此処は一言くらい言っておきますか。

「ところでCクラスとの試召戦争はどうでした？」

「？ 誰だったかしら……まあ、いいわ。時間は取られたけど、それだけだったわよ？ 何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗って昨日Aクラスに攻め込んだCクラス。

その勝負は半日で決着がついて、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けているところですね。

「あなた達はBクラスとやりあう気はありますか？」

「Bクラスって……まさか昨日来ていたあの……!？」

「ええ。アレが代表をやっているクラスですね。幸いにも宣戦布告はされていないようですが、あんなのに宣戦布告されたらどうするんですか？」

ちょっと嫌みっぽく言ってみます。

この罠に引っ掛かるか、掛からないかで勝負が決まります。

っというよりも、あんなのと一緒の空間にいたくないのが正常な人間の反応ですね。

「で、でもBクラスはFクラスと戦争したから、3ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

試召戦争の決まりの1つ、準備期間。

戦争に敗北したクラスは3ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできません。

これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで試召戦争が泥沼化しない為の取り決めだそうです。

教育者として正しい判断です。

「知っているはずですよ？ 実情がどうであれ対外的にはあの戦争は和平交渉にて終結となっていることを。規約には何にも問題はありません。それと、付け加えるとBクラスだけじゃなくてDクラスもこれに当てはまりますけど」

くすくすと笑いながら言います。

これは設備を入れ替えなかったからこそできる方法です。これぞAクラス対抗のための対処法です！

「……それって脅迫？」

「脅迫ではありませんよ？　これは“交渉”です」

交渉モードの私はいつもより手強いですよ……？

「うーん………わかったわ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないし。その提案受けるわ」

「え？　本当？」

明久……

「だって、あんな格好をした代表のいるクラスと戦争なんて嫌だし……」

まだ正常な人のようです。

「でもこちらからも提案。代表同士の一騎討ちじゃなくて……お互い五人ずつ選んで、一騎討ち5回で3回勝った方が勝ち、っていうのなら受けてもいいわよ」

「……」

あちらは私か瑞希が出るのを警戒してそんな案を出しているんでしょうね……

「こちらから私か瑞希が出るのを警戒しているんですか……？」

「ええ。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし………それに噂のファルコンさんもいるしね」

……ばれてましたか。

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理よ。その言葉を鵜呑みには出来ないわ」

これは、戦争だからと付け加える優子さん。

「確かにそうですね……戦争は騙しあいですから」

「そうね……で？　どうなの？」

「良いですよ？　別に」

此処までしないと勝率がないので。

「ホント？　嬉しいわ」

「けれど勝負方法はこちらで決めさせて下さい。それ位のハンデは欲しいところです」

これ位の権利は欲しいところですね。

「え？　んー……」

クラスを代表しての交渉です。この会話次第で仲間の立場が変わってくるのですから、優子さんも慎重になってきますね。

「……受けてもいい」

「うわあ！」

「ひゃうっ!？」

あ、明久!？

何て声出すんですか……！　私もつられて出しちゃったじゃないで

すか……！

「……雄二の提案を受けてもいい」

突如現れた静かで凜とした声。

いつの間にか霧島さんが近くに来ていました。まさか、気配を消してくるとは……

「あれ？ 代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件ですか？」

「……うん」

私の返事にうなづく霧島さん。

そのまま無言で私と雄二を見た後に瑞希を値踏みするかのようにつくりと観察していきます。そして、私達の方を向いて言い放ちます。

「……負けた方は何でも1つ言うことを聞く」

「……これは、色々とヤバいのではないのでしょうか？」

雄二に目線を合わせると、口が引き攣っていました。

条件次第ではとんでもない事態が待っているというリスク。なぜか私の中では悪寒がしてたまりません……

私、何も身に覚えがないんですけど。

「……………（カチャカチャ）」

「ムツツリーニ、まだ撮影の準備は早いよ！ というか、負ける気満々じゃないか！」

なぜかカメラの用意をしている康太。それを見た明久が止めます。
「というかその行動を見て、負ける気満々とわかったんですか？」

「じゃ、こうしよう？ 勝負内容は5つのうち3つそっちに決めさせてあげる。2つはうちで決めさせて」

全ては譲ってくれませんでした、妥協案を得ることができました。

（これでいいのか？ 音橋）

（本当はもう少し絞りたいところですが、今はコレが精一杯と言ったところでしょう）

（……分かった）

「交渉成立だ」

「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんと絵里が了承してないじゃないか！」

明久の口からなぜか出てくる瑞希と私の名前。

……何故？

「心配すんな。絶対に姫路と音橋には迷惑はかけない………多分」

自信満々のように言っていた雄二が最期に言った一言で凄く不安になってしまいます。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでもいいか？」

「ええ、そのくらいが丁度良い頃合いでしょうね。いいですか？」

「……わかった」

これで全てのカードが揃いましたね。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」

「……絵里は残って」

「え？ 私ですか……？」

「……うん」

……あー。

「はい、分かりました」

「ムツツリーニイイイ！！！！」

「何やってるんですか……さっさと帰って下さい。私は私で用事を済ませます」

「………分かった。無事に帰ってこい」

みんなが出て行ったのを確認してから私は霧島さんを見ます。

「……絵里」

「はい」

「……お茶飲む？」

「あ、Aクラスの設備とか見ていても構いませんか？ 色々面白そうなので」

「別に構わないわよ」

戦争とは全く関係のない会話がその後30分間展開されていました。

第7話「カードは揃い始める」(後書き)

「……ね、ねえ」

「何だい？ ええと……佐藤美穂さん」

「あの人誰か知ってる？ 久保君」

「……あれはFクラスの音橋絵里さんだね」

「音橋、絵里……ありがとう」

「？ ああ」

一応この後に繋げるようにフラグ立てておこう。

第8話「卓袱台↓ミカン箱↓画板+ゴザという下がり方」

「では、両名共準備は良いですか？」

Aクラス戦が開始される。

舞台は代わりAクラス。

立会人は試召戦争で幾度もお世話になった高橋先生です。

「ああ」

「……問題ない」

「それでは1人目の方、どうぞ」

「アタシから行くわ」

出てきたのは秀吉のお姉さんです。対するこちらは、

「ワシがやろう」

その弟である秀吉が相手です。

……………あ。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラスの小山さんはこの間秀吉が凄く罵倒していた人ですね。

……………って、このままだと

「じゃーいいや。その代わりちよつとこっちに来てくれる？」

「うん？　ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

（姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？）

（アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？　どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？）

（はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――あ、姉上っ！　ちがっ……！　その関節はそっちに曲がらなっ……！！）

ガラガラガラ

扉を開けて木下さんが戻ってきます。

「秀吉は急用が出来たから帰るってさ。代わりの人を出してくれる？」

ええ。きつと優子さんに着いている紅い液体はトマトソースです。きつとスパゲッティでも食べてきたのでしよう。ハハハハハ。お茶目ですね。

「では私が出ます。ただ1つ提案が」

「へえ、提案ね」

「えーっと……………」

「早くしなさいよ」

無理なことを言わないで下さい。

あんな出来事計算外だったんですからスグに案が浮かぶはず——あ、そうです！

「えっと、選択教科の権利を譲るので次の2回戦を含めたタッグバトルをやらせて下さい。どうですか？」

「そうですね……木下さん、どうですか？」

「……………ええ。提案に乗りたいと思います」

了承してくれたみたいです。

こんな突拍子もない提案に乗るということは確実に勝てる、という自信からでしょうか。

……いや、そんなはずありませんか。

「そうですか。それではとりあえずは、と」

なぜか高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁全体を埋め尽くすほどの大きなディスプレイに結果が表示されました。

『生命力	Aクラス	木下優子	VS	Fクラス	木下秀吉
------	------	------	----	------	------

DEAD	』	WIN	VS
------	---	-----	----

いえ、多分まだ生きています。

「ではペアの方どうぞ」

そして急遽私からの提案によりタッグ戦になりました。

これでこちらが勝利すれば一気にリーチ。ただし、負ければ相手がリーチになってしまいますが。

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

「よろしく、佐藤さん」

Aクラスからは木下優子さんと佐藤美穂さんが出るようです。
対するFクラスは私と……

「全く、相変わらず無茶をしてくれる」

「これで勝てば一気にリーチです。1度勝利を譲るよりは断然マシでしょう」

「確かにそうだけどな……まあ、音橋行って来い！」

「はい！」

残り一人は――

「よし。頼んだぞ、明久」

「え！？ 僕！？」

「it is a joke Yuj! ? n c i d e n t a l l
y i t i s O K ― i t b e l i e v e s ― i
f i t s a y s v e r y , s i n c e a w a y m a
r r i a g e r e g i s t r a t i o n a n d e v e r y t
h i n g s o t h e r w i l l b e i m m e d i a t e l
y g i v e n t o S h o k o …… : 良いですか？」

「何を言っているか分からんが……大丈夫だ。俺はお前を信じている」

ほう……この英文を日本語訳すると【冗談ですよ、雄二。因みに

大丈夫だ、信じている何て言ったら翔子ちゃんに直ぐさま婚姻届その他諸々をあげますからね』
と、言うことですので後で婚約届けをあげておきましょう。

「ふう……やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員にお前の本気を見せてやれ」

……………え？

まさかこの世界の明久はひと味違うとでも言うんですか……？

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ？』

明久の言葉に動揺するクラスのみんな。

……………え？　嘘でしょう？

「吉井君、でしたか？　あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤さんが明久の何かに気づいたような発言。一方、私と木下さんは頭に　？　を大量に浮かべています。

「あれ、気付いた？　ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃいない」

袖をまくって不敵な笑みを浮かべる明久。
こ、これは期待しても良いんですか！？

「それじゃあ、あなたは……」
「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕――」

そして明久は、大きく息を吸い込んで――

「――左利きなんだ」

『Aクラス 佐藤美穂&木下優子 VS Fクラス 吉井
明久&音橋絵里

物理 389点 & 414点 VS 62点
& 3897 』

「ばかあ!?! 何? この人の自信は何だったんですか!?!」

「おかしい。本気を出したのに」

「それで本気なんですか!?! 少しでも期待した私がバカでした! っというよりもテストに左利きも右利きもありませんよ!」

襲いかかってくる召喚獣の攻撃をよけて、体勢を立て直します。
テストの点数は前回と比べてかなり低いです。

「……………いや、隣で消しゴムを削って龍を作っていた明久に気を取られたんですよ。」

「明久! なるべく敵の攻撃は避けていて下さい! 私が仕留めますっ!」

「わかったっ!」

優子さんの召喚獣の武器は槍。攻撃方法は至ってシンプルな突進攻撃が中心です。

佐藤さんの召喚獣の武器は弓。攻撃方法は打撃と弓矢ですね。

ガキインッ！

突撃してきた優子さんの召喚獣の槍ごと剣で後方へ吹き飛ばします。明久に大した期待はしていませんが、この点数なら私だって1人で多分勝てます。

「装備変換【二刀流】」

これで2人を相手にしても大丈夫ですね。

召喚中の腕輪から放たれた光。光が止むとそこには私の召喚獣がいました。

………ただし、私の望んでいない姿で。

私が選んだのはタッグバトルにはかなり有利な二刀流。一撃一撃の個々としての攻撃力は下がる物の、点数差で何とかなるほどの物。

しかし現れたのは大険を片手で持った軍服姿の私の召喚獣。目が少しアレですね……

何て思っているとその召喚獣は佐藤さんと明久の闘っているところへ向かって——って、まずいつ！？

「明久っ！ 急いで避けて下さい！ その召喚獣は——」
「えっ？」

ズアアッ!! ↑2人の召喚獣が切り裂かれる音

「ぎえいあああああああああああ?!!?!?!?!?」

意味不明な叫び声を残して倒れる明久。

恐らく今まで体験した中で1番のフィードバックだった事でしよう。

現在の私の召喚獣は【混乱】もしくは【混沌】と言う私の腕輪の中の機能です。

私の腕輪の効果は武器変換。その名の通りに自分の望む武器に自由に変えられるという物です。

この【混乱】はそんな中でも大凡1／5の確率で出てくるといってもない物です。

混乱は召喚者の操作に従わず、相手を抹殺するためだけに勝手に動くという物です。

しかも敵味方問わずに。

それに加えて頭を抱える難点が1つ。

ドドドドドドッッ!!!! ↑私の召喚獣が突撃していく音

「きゃああああ………あ?」

拍子抜けした優子さんの声。

頭を抱えてしまう問題点。それは1つ1つの動作にかかる点数の消費が半端無い。それだけ。

1つの動作に約1000点ほどを使ってしまう事です。

襲いかかったと同時に消える私の召喚獣。

走る、切る、走る、襲う。これで全ての点数を使い切ったんでしょうね。

「え、えっと……Aクラスがタッグ戦勝利ということですよね？」

「……はい。構いません」

蚊の鳴くような声でなんとか高橋先生に返事をします。その場にはしばらく沈黙が続きました。

茫然とした全体。

はあ……………

「あ、あの……何があったんですか？」

「瑞希……ただ運が悪かったとしか言いようが無いですね」

「そ、そうなんですか……」

明久の方を見ると美波が明久の死体を引きずっていました。

「……………あー、勝負の方はドンマイ」

次は雄二ですか。

「……だ、だいじょうぶです。後少ししたら復活するんで気にしないで下さい」

「そうか。涙目になって言われても説得力はないんだがな……だけど、勝負はここからだ」

ううう……面目ないです。

「……………そうですね、ってことは次は」

「ああ。次は作戦通り――」

「では3人目の方どうぞ」

「……………（スクツ）」

康太が静かに立ち上がります。

さて、選択科目選択がここで初めて生きてきます。

というのも康太の総合科目の点数の内、実に80パーセントを保健体育で占めています。

その単発勝負ならAクラスにですら負けはしません。

まあ、これのために単発勝負を選んだと言っても過言ではありませんが。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにしたボーイッシュな女の子が出てきました。

彼女は確か1年の終わりに転入してきた――

「1年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

そんな私達の心がわかったのか、ちゃんと説明してくれた工藤さん。

「教科は何にしますか？」

高橋先生が康太に訊ねます。まあ、勿論科目は……

「……………保健体育」

康太の唯一にして最強の武器。
それを選択したのは至極当然ですね。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね。」

どうやらまだ、目の前にいる敵の脅威に気付いていないようですね。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ キミとは違って実技で、
ね♪」

何を言っているんですか。この人は。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

……………展開が読めてきましたね。なら

「フッ。望むところ——」

「明久にはそれは必要ないでしょうね。下手すれば、そんな機会一生無いでしょうね」

「……………」

「音橋、明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが」

まあ少しばかりの可能性はある物の、その確率といえど朝起きたら漫画の世界にいった（テヘツ）位の確率でしょうし。

……まあ、私の場合は特例ですけど。マジで。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試験^{サモン}召喚っと」

「……………試験召喚^{サモン}」

2人に似た召喚獣が、それぞれ武器を手に持って出現します。
康太はBクラス戦でも見せた小太刀の二刀流。一方工藤さんは――

「なんだあの巨大な斧!？」

工藤さんの召喚獣の武器は巨大な斧。更には腕輪付きです。

「実践派と理論派、どっちが強いを見せてあげるよ」

工藤さんが笑いかけると同時に腕輪を光らせながら召喚獣が動き
ました。巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードでムツツ
リーニの召喚獣に詰め寄っていきます。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

そして、豪腕で斧を振るいます。

しかし――

「ムツツリーニっ!」

明久の叫び声が聞こえます。斧が召喚獣を両断する――

「……………加速」

と思った瞬間に康太が呟くと、召喚獣の腕輪が輝きます。
すると康太の召喚獣の姿がブレて見えなくなりました。

「……え？」

康太の腕輪の能力は加速。

その名の通りに人が目では追えない速さまで加速することが可能となります。

……私には見えていましたが。

「……………加速終了」

康太がそう呟くと相手の召喚獣が倒れます。

一足遅れてデイスプレイには点数が表示されました。

『Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太

保健体育 446点 VS 572点

』

流石。ムツツリーニのあだ名は伊達じゃないですね。

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

雄二が明久に説明してあげます。

イマイチ、ですか。末恐ろしいですね。

「そ、そんな……！ この、ボクが……………！」

工藤さんが床に膝をつきます。

自信を持って挑む。

全力を持って挑むとその後のダメージは何倍にも跳ね上がりますからね。

「これで2対1ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進めていきます。自分のクラスがやられても気にならないのでしょうか？

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらからは当然ながら瑞希が出ます。

私と同じでFクラスにいながら、Aクラスとまともに戦える数少ない人材です。

「それなら僕が相手しよう」

Aクラスから歩み出たのは――久保利光君ですね。

「やはり来たか、学年次席」

彼の名前は久保利光。

瑞希や私に次ぐ学年3位の実力の持ち主で、振り分け試験を瑞希と私がリタイアした為、彼は私達の学年で次席の座にいます。

因みに明久に好意を持っている人のうちの1人です。

「ここが1番の心配どころだ」

雄二が心配するのには理由があります。

久保君と瑞希の実力はほぼ互角。前回の総合科目の点数差は20点程度でしかありません。

瑞希が連戦で疲れている今、負ける可能性が高くなったというわけ

です。

でも心配はいらないです。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

「ストップ！ 何を勝手に――」

「構いません」

「瑞希……」

文句をつけようとした明久を止める瑞希。

そうですね。

だって仲間を信頼しない人なんていませんから。

「それでは……」

高橋先生が前と同じように操作を行います。それぞれの召喚獣が喚び出された瞬間に一瞬で決着がつかしました。

『Aクラス	久保利光	VS	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	VS	4409点	

』

『マ、マジでか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ！』

点差、凡そ400。

AクラスとBクラスの動揺にも頷ける点差です。

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

久保君が悔しそうに瑞希に訊ねます。

つい最近までほとんど同じだった実力が、いつの間にかここまで離されたんです。気にもなりもするでしょう。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが、好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

好きな物の為に頑張れる、ですか。

瑞希、本当にこんな馬鹿なクラスでも皆のことが好きなんです。ね。とても、恰好良い台詞じゃないですか。

「これで2対2です」

高橋先生にも若干の表情の変化が見られます。FクラスがAクラスに匹敵しているのですから無理ありません。

「最後の1人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは霧島さんが。そして我がFクラスからは当然、

「俺の出番だな」

坂本雄二。我らがFクラス代表にして、勝利を託さなければいけない人です。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ……！

雄二の一言でその場が騒ぎ始めます。

寄りにもよって最後の締めが小学生レベル。
ざわめきも当然でしょう。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

霧島さんが、大化の改新で間違えると知っている私たちにとってはこれは勝利への鍵です。

私たちFクラスがAクラスに勝ち目があるを知ってかAクラスの皆さんはざわついているようです。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください」

一度ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出ていきます。
高橋先生なら小学生レベルのテストを持っているんでしょうね……
多分。

「雄二、あとは任せたよ」

ぐっと雄二の手を明久が握ります。

「ああ。任せてくれ」

「……………（ピッ）」

康太がこちらに歩いてきて、ピースサインを雄二に向けます。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フッ）」

康太は軽く笑うと元の位置に戻っていきました。

「……雄二」

「音橋、お前がこのクラスに来てくれてずいぶん助かった。今まで御苦労だったな」

「油断は禁物ですよ。まだ、Fクラスが勝ったワケじゃないんですから」

「ああ。分かった」

「因みに聞いておきましょう」

「何だ？」

私は息を吸い込んで聞きます。

「まさか、小学生レベルだから勉強何てしてない何て言いませんよね？」

「……」

「……目をそらさないで下さい」

「あ、あの……坂本君。あのことを教えてくれてありがとうございます」

した」

「ああ。明久のことか……別に大したことじゃなかったし良かったんだがな」

話をうまくそらしましたね……

「はいっ」

姫路さんの元気な返事を聞いて、雄二は楽しそうにやりわりとした笑みを浮かべました。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

戻ってきた高橋先生がクラス代表2人に声をかけます。

「……はい」

短く返事をして、霧島さんが教室を出て行きました。

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行ってらっしゃい。坂本君」

「ああ」

「もし満点を取って帰ってこなかったら命はないと思って下さい」

「……………ああ」

瑞希と私に送り出されて、雄二も最後の戦場へ向かいます。

これでいよいよ決着ですね。泣いても笑っても、試召戦争が終了します。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

高橋先生が機械を操作すると壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出されました。

先に霧島さんが席に着いて、続いて雄二がやってきます。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分、満点は100点です』

画面の前で飯田先生が雄二と霧島さんの机の上にテストを裏返しのまま置きます。なんか、自分が受けるわけでもないのにドッキドキです。

『不正行為などは即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかっている』

『では、始めてください』

2人の問題用紙が表にされます。

「絵里ちゃん、いよいよですね……」

私の隣にいる瑞希がそう言いました。

「ええ。いよいよです」

「これで、あの問題がなかったら坂本君は……」

「集中力や注意点等で劣る以上、延長戦で負けるでしょうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「そうです」

もしもあの問題が出ていたら私たちの勝ちです。Aクラスの大きな

大きなディスプレイに問題が映し出されていきます。

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

穴埋め形式の問題ですね……

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「あ……！」

出て、いました。

「え、絵里ちゃんっ！」

「出ちゃいました！」

「これで私たちのっ！」

「これで私たちの卓袱台が」

『システムデスクに！』

揃ったFクラスみんなの言葉。これで、私たちの卓袱台がシステムデスクになるんです！

……ただ、何となく嫌な予感しかしないのですが。

「これで、僕らの勝ちだ……！」

『うおおおっ!』

明久の声で、教室を揺るがすような歓喜な声。
そして、テストの結果は……………

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

「Aクラス	霧島翔子		
坂本雄二	53点	97点	V S
			Fクラス

卓袱台↓ミカン箱

次設備…卓袱台

前設備…画板＋ゴザ

私達の卓袱台がシステムデスクに変わることなく、愛らしいミカン

がプリントされたミカン箱になったのは言うまでもないでしょう。

第8話「卓袱台↓ミカン箱↓画板+ゴザという下がり方」（後書き）

「現在北海道では雷祭が多発しております。
傘は避雷針になるのでご注意下さい」

パラボラ立てて、電気引いたら何年分の電気代が浮くのかな、と最近思っている作者。

「何を言ってるんですか……」

最近雷多いんだよ……今日なんて1回近くに落ちた上にゲリラ豪雨だぞ？ ヤバイ。

地震雷 火事親父。

残すは火事と親父か……

「親父はいりませんよ……そこまで脅威じゃないですし」

今年でやっぱり地球は終わるのか……？

それともやっぱり来年か……？

今年に一回滅びて来年にもう一回滅びて再来年にももう一回滅びる予定が入っているそうです。

生き延びた人達はドンドン抹殺される3年間となるでしょう。

以上、天変地異大好き、【世界滅亡チャンネル】がお送り致しました。

第9話「初めての敗北と新たなる影」

「3対2でAクラスの勝利です」

視聴覚室に駆け込んだ私たちに対する高橋先生のとどめの台詞が響きます。

「……雄二、私の勝ち」

「……………殺せ」

よし、覚悟は出来てますね。

「良い覚悟だ！ 殺してやる！ 齒を食いしばれ！」

「エネルギー全開、投影開始……」

取りあえず日本刀10本を作りサイコキネシスで宙に浮かべます。

「ちよっ！ 吉井も絵里も落ち着きなさい！」

日本刀の起動に美波が入ってきたので仕方なく、仕方なく！！ 日本刀を消します。

「だいたい、53点ってなんだよ！」

「そうです！ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと——」

「いかにも、俺の全力だ」

「この阿呆があ!!!!!!」

「殺します。殺しきります」

「絵理はとりあえず落ち着きなさい!」

「ごふあっ!?!」

「吉井も落ち着きなさい! アンタだったら30点もとれないでしようが!」

「それについては否定しない!」

否定、して下さい……

というか美波……何故、鳩尾に……

「それなら坂本君を攻めたら駄目ですっ!」

「くっ! なぜ止めるんだ姫路さんに島田さんまで! この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに!」

「落ち着いて下さい! それ体罰じゃなくて処刑ですから!」

凄く落ち着いてます。

だからこそその罰が必要なんです。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「雄二は前日に勉強しませんでしたしね」

「良いわけはしねえ」

本当に、良い覚悟ですね。

「……ところで約束」

ああ……

「……………! (カチャカチャカチャ)」

何故康太はカメラを……こら、明久。手伝っては行けませんよ。

「分かっている。何でもいえ」

……………

「……………それじゃあ——」

私に目を向け、言葉を放ちます。

「……………絵里、私とつきあって」

……………

「はえ? えっと……………え? ごめんなさい。雄二ですよ? 決して私なんかじゃありませんよね? 翔子ちゃん?」

「翔子ちゃん?」

「音橋と翔子は幼なじみだと昨日聞かされた」

「あ、そうなんだ」

「……………だから私は絵里とつきあう。ちなみに雄二とは婚約済み」

「……………俺の意志がない婚約ってどうなんだ」

え、っと……………まずは

「とりあえず……………おめでとうございます、雄二」

「全然嬉しくない」

私は翔子ちゃんに向き直る。

「え？ 女ですよ？」

「……私は、雄二と絵里以外には興味がない」

「いい方が明らかに可笑しいですよ………因みに拒否権は」

「……無い。約束は守ってもらう」

取りあえず後でその鼻血を垂らしている2名を締めるとしてもです。

逃げ場が……ありません。

「翔子ちゃん……」

「……なに？」

「ごめんなさい！！！」

ガラッ ↑窓を開ける音

「明久、後は頼みます！」

かくなる上はこれしかあるまい。

三十六計逃げるに如かずうううう！！！！！！

「……逃がさない！」

グラウンドに着地成k――

「ってか、早い！ 早いです！ もう、人間技じゃありませんよ！？」

私が地面に着地すると同時に翔子ちゃんがグラウンドに来ていました。

「……………何故西村先生が？」

病院に行ってから来た学校の我等がFクラスの教室。
そこにはミカン箱と、西村先生が置いてあった。

「音橋か。お前らは試召戦争で負けただろう？」

「はい」

「そのおかげで、俺に担任が引き継がれたんだ」

「ああ、それですか……ところで、雄二は何で魂が出ている状態なんですか？」

「いや……あいつらは学校に来たときからああだったな。坂本はがたがた震えてるし、吉井はしきりに食費がと呟いていてな」

というと、私が逃げ出した後に雄二に何かありましたか。

明久はデートで食費を全て絞り出された、と。

「まあ、席に着け」

「あ、はい」

これから数ヶ月。

この設備でのFクラスライフを楽しみましょうか……

そしてきつとまた行われるであろう試召戦争に向けて、私達は大人しく自分たちの牙でも磨いていることにしましょう。

何事もなければ、の話ですが。

その頃とある場所にて

「いきなり呼び出すなんて急すぎじゃね？」

“ごめんごめん。でもお母さんも最近絵里ちゃんが文月学園に通ってるって聞いたから……それと言葉遣いちゃんとしようね？”

「分かった……じゃなくて分かりました。それで母様。何で転入がもう少し先なんですか？」

“清涼祭って言うのがあるらしいんだけど……それが始まる前に色々やることがあるのよ。色々”

⋮

“龍ちゃん、沈黙はお母さんも嫌だよ？”

「取りあえず転入手続きは済ませておきました。それじゃあまた改めて」

“フィアンセと頑張ってこいよ！色男ー！”

「母さんの声色使ってんじゃねえ！ 親父！！」

“龍ちゃん？言葉遣い”

「はいっ！……！！」

新たな影が動き出していた。

“ 又那川の名に恥じぬような学園生活を送りなさい……………龍夜 ”

「はいっ！」

第9話「初めての敗北と新たなる影」(後書き)

龍君キターーーーーー！

やっとなって来た龍君！

さて、来週はいよいよオマケシリーズ。

季節にあった内容と、全く当てはまらない内容をやるのは、作者も運が悪かった！！

「今日呼び出したのはそのためだけですか？」

いえ、違います絵里様……

今回はいつものアレです。

「……分かってますよ。それじゃあ行きますよ」

「PV、7,799アクセス！ ユニーク 2,000人 おめでとうっ！……！」

約ではある物の、ここまで僅か11部……

本当に皆様のおかげです！

「因みに総合評価も56ポイントを記録しています」

全作にはまだまだ及ばない物の、私としては少しずつ満足している現状です。
ではまた次回。

「それではまた来週」

コラッ。

もしかしたら他の時にも投稿するかも知れないじゃんか

「いえ、あり得ません」

ひどすっ!？

1 閑話「トリックオ阿德リート」

ハロウィン。

皆さんもご存知の通り、仮装行列を作りご近所を練り歩き、

『トリックオ阿德リート』

つまり、お菓子か悪戯かを選べと言い、お菓子を貰っていく至ってシンプルな行事でもあります。

その仮装行列は子供のいるところ全ての地域で執り行われます。

「トリックオ阿德リートですっ！」

「……………何、してるのさ…………絵里」

「明久？ トリックオ阿德リート…………お菓子か悪戯か選びなさい」

「なにそれ！？ 拒否権はないの！？」

「悪戯を選びますか。それでは美波や瑞希に色々と言ってしまおうとしましょう。脚色も加えて」

「喜んでお菓子をあげよう。僕のとっておきのペルタースオリジナルだよ」

それは、年齢を問わないのですっ！！

「因みに絵里は何の仮装なのさ？ 全然仮装しているようには見えないけど？」

現在は学校で、私は制服の上にパーカーを着ているだけです。
まあ確かに完璧な仮装とは言えませんね。

取りあえず仲直りした私達。

このパーカーは封印するにしても……おもしろみがありませんね。

「のう絵里よ。そんなに何かしたいんならハロウィンパーティーでも開けば良からう？」

「それです秀吉っ！」

「む？」

「今日の放課後に、学校でハロウィンパーティーを開けば良いんですよ。ジュースやお菓子を買いそろえて……一番うまく仮装出来た人には豪華景品有り……これです！ 流石秀吉ですね！」

「（すまぬ……ワシはどうやら変な扉を開いてしまったようじゃ……）」

そうと決まれば、ですね。

「明久。みんなに今日の放課後ハロウィンパーティーを開くと伝えておいて下さい。一番うまく仮装できた人には豪華景品有りと伝えておいて下さいね？」

「？ よく分からないけど分かったよ」

「明久も是非参加して下さいね？」

「うん。固形物が食べられるなら喜んで参加するよ」

流石ですね……

では、そうと決まったら早速準備ですね。

「因みに衣装はどうするんじゃ？」

「演劇部に依頼しましょう。仮装用のなら演劇部にも少しはあるはずですし」

「分かったのじゃ。ワシが取り合ってみよう」

「お願いしますね」

さあ……楽しい楽しいハロウインの始まりですね……

放課後――――――――――

「……」

絶句。

いや、確かにパーティーを開こうとは言いましたよ？
私が元凶です。

ただ私がパーティーを開く場所はFクラスの教室で、仮装をしてお菓子をつまむ物でした。
ですが今此処で行われているのは――

【ハロウィンだよっ！ 仮装大会〱ミスコン&ミスコン（男子用）
〱】

……………良し。

買ってきたお菓子やジュースをその場に置き、私はその場から一刻も早く離脱するべく足に力を込め――

「……絵里」

「離して……！ 離して下さい。翔子ちゃんっ！！ 私は一刻も早く此処から戦線離脱を……！！」

「……駄目。絵里は私と一緒にアレに出る」

「いやあああああ……！！！！！！！！！！」

誰か！ 誰か助けて……！！

私は見てるだけで良いですって！ 私自身やりたくないで……か、仮装タノシミダナーッ……！！

翔子ちゃんの目が……目があり得ないほどに怖いです……

「……絵里はコレ」

「！？ そ、それはそれで……い、いえ！ 喜んで着させて貰います……！！」

……レベルアップ、翔子ちゃん。

更衣室にて用意された衣装に身を包みます。

翔子ちゃんには先に行くようにしてもらったから大丈夫でしょう。

……今更ですが、誰がこんな事を考えたんです……あ、私です。すね。

でも何故こんなに大きな事に……

取りあえず誰かに見つからないようにひっそりと行くのが打倒でしょうね。

左右の確認……人の気配はなし。

「……行きますか」

そして更衣室から一步踏みだし――

「あれ？ 音橋……さん？」

「……………しくしくしく……………」

「ええ！？ 何で泣き出すの！？」

終わりました。

もう全てが終わりました。

気配が無いって思っておきながらも人いました。

何この人、影薄い！

「あれ？ 何か失礼なこと考えなかった？」

「いえ、別に……………って、あなたは確か……………」

「ああ。私は3年A組の東雲優花。あなたの……………まあ、ファンって所かな？」

「ファン？」

「いや別に何でもないから今のは忘れて」

ニコニコとした表情で告げる東雲優花さん。

短めのポニーテルをしていて、更に眼鏡をかけているせいかな大人しい印象を受けます。

「それにしても音橋さん。その恰好って……………」

「あ……………いや、その、ですね……………」

たじたじ。

今の私の恰好は、狼のコスプレです。

付け耳・付け尻尾、秋だというのに腋を露出した巫女服のような物。

……何がしたいんですか？ 翔子ちゃんは……

「もしかしてハロウインのコスプレ？」

「……そうです」

「それって私が参加しても大丈夫？」

「コスプレさえしていれば問題はないかと……」

「あ。コスプレかあ……」

東雲さんは【ハロウインだよっ！ 仮装大会くミスコン&ミスコン（男子用）く】に出たいんだろうか……

仕方ない。

「東雲さん。良かったらコレどうぞ」

「？ コレって……パーカー？」

「魔女か狼人間か吸血鬼になれますよ？」

「それじゃあ……吸血鬼」

パーカーを少し弄ると、東雲さんの背中から小さな悪魔の羽が生えてきます。

更に犬歯も僅かながらに発達したように見えます。

そして、目は深紅。

「凄い……」

「勿論です。東雲さん、一緒に行きせんか？」

「喜んで。美味しそうな狼さん」

「食べないで下さいね？ 吸血鬼さん」

「（……美味しそうなのに。主にせ（ry）」

2人でちよつとした洒落を言いつつも会場に向かう。
もう、先ほどまでの恥ずかしさはあまり無かった。

『さてさて始まりました、【ハロウィンだよっ！ 仮装大会〜ミスコン&ミスコン（男子用）〜】！ 司会を務めるのはこの私！ 放送局部長の直井千香がお送り致しますッ！！』

……………会場エ…………

『さあて！ エントリーしたのはいつものお騒がせ駄目駄目Fクラスから、最強頭脳のAクラスまで、選り取り見取りの美女美男揃いッ！！ ではいよいよ始まりますッ！！！！』

私たちはエントリーした覚えが無いので大丈夫ですよ。見ているだけで

『それではエントリーされた方々を紹介しますッ！！ 液晶画面をご覧下さいッ！！！！』

ハイテンションな司会ですね……

液晶画面に映し出されていくエントリーした参加者の顔写真。

その中には明久や雄二等もあり、そして次の瞬間

【エントリーNo. 327 音橋絵里】

「ぶっ!?!」

【エントリーNo. 328 東雲優花（特別参加の3年生）】

「あれ？ 私？」

「……安心して。抜かりはない」

「特別に席を設けさせて貰いました」

そんな翔子ちゃんとFFF団の声が聞こえたような気がした。

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

「結局優勝は東雲さんですか」

「あはは。取れちゃったね」

「まあ途中で審査員が主に出血多量で倒れたからですね。おめでと

うございます」

「それよりもさ」

「何ですか？」

「何で私達の記憶に絵里ちゃんの仮装した記憶がないのかな？」

「忘れた方が良くもあるんですよ？」

全力で私の仮装を見た人の記憶を消しました。

主に暴力的な意味と能力的な意味で。

1 閑話「トリックオアデリート」(後書き)

はい。

オマケです。

これからオマケ○とは書かずに、○閑話と書いていきます。

季節にあった内容を書ければいいかなあ、と思っています。

こ、今回はテスト投稿で、その……べ、別にもう話しがいづかなくなっただからこんな事になったんじゃないんだからね!?

あ、やめ……ゴミは投げないで! は? ゴミじゃないなら良いってワケでもな——(強制終了)

2 閑話「料理は危険な香り……らしい」

それは中学時代の思い出だった。

「……瑞希はお弁当自分で作ってるんですか？」

「私ですか？ 恥ずかしながら自分で作った物は持ってきていないんです」

「へえ」

「でも、自分で作ったデザートを持ってきちゃいました。絵里ちゃん食べてくれますか？」

「ええ。では……いただきます」

— — — — —
— — — — —
— — — — —

チュンチュン……

……

「……………」

いや、あの……うん。そうだね。

泣いても、良いかな？」

思い出してはいけないうな、そんな中学時代の記憶を夢に見てしまった今日。

不覚にも徹夜作業を行ってしまった私は、正午まで寝てしまったようだった。

「――それでは、授業を終わります」

……あ。

先生の号令と共に張りつめられていた教室の空気が一気に緩みます。お弁当の時間ですね。

「絵里ー、食堂に行こう？」

「明久……お金あるんですか？」

「塩と砂糖を持参してきたから材料はバッチリだよ！」

「胸を張って言う事じゃありませんよ……」

周りからの哀れみの視線は感じられないので、今の会話は聞こえていなかった様子。

良かったですね、明久。

「え……塩と砂糖って……？」

「……姫路さん？」

聞こえていないと思っていた会話は、どうやら瑞希だけに聞こえていた様子。

「あの……そんな食生活をしていたら身体をこわしちゃいますよ？」
「え……いや、でも……色々と、あってね……」

明久がそう言うと、瑞希は少し考える素振りを見せてから口を開きました。

「よろしければ明日、お弁当作ってきますけど……よろしければどうですか？」

「え？」

「明久、顔と文字」

………っというか、へ？

「よろしければ皆さんの分も作ってきますよ？」

周りにいたいつものメンバーにそう告げる瑞希。

う、ううううう嘘ですよね……？

がくがくと膝が笑い出し、その場にへたり込んでしまいます。

「絵里？　どうかしたの？」

「い、いえ……何でもありません……」

私はしばらくの間そこで絶望に暮れていました。

翌日（昼食時）　――――

――――

雄二と美波がジュースを買いに行っている間も、私はカタカタと震えていました。

正確に言うと昨日からカタカタ震えてますけど。

「（ひよい、もぐもぐ）」

「ああ、ずるいよ！ムツツリーニ！」

気付けばもう既に食べ始めていました。

そして康太は次の瞬間――

バタンッ！！

ガクガクガクガク……ビクンッビクンッ！！

「きゃあ！？ 土屋君どうしたんですか！？」

むくり……

ぐっ……！

康太が起きあがり親指を立てます。

ごめんなさい、康太……膝が凄く笑っていてももの凄く説得力が……
無いです。

「（……どう思う？ 秀吉、絵里？）」

明久が表情1つ崩さずに私達に聞いてきます。

……そうですね。

「（わし個人の目からしても、演技には見えんのう）」

「(……………ずっと前の私に見えます)」

ぼそっと呟いてサイコメトリーで材料を読み取ります。

材料……前半↓普通の食材

後半↓硫酸・アンモニウム・塩酸・硝酸・メチルアルコール・塩素酸カリ

……………ごめんなさい。私今日死にます。

「(……明久。コレは流石に不味いです)」

「(……………どうするの?)」

「(私は胃、過敏なほうです……)」

「(僕もだよ。食事の回数が少なくて胃袋が退化していると思う。)

」

「(……ワシが行こう。)」

「「(秀吉!?)」」

「(生憎胃袋は丈夫な方での。ジャガイモの芽くらいなら食べても平気なのじゃ)」

ジャガイモの芽って毒じゃありませんでしたっけ?

「(……分かりました、頼みます……………お茶を、用意しておきますね)」

「(ああ……でh)」

「おっ、うまそうじゃねえか。」

「「(雄二!?)」」

「(ぱくっ)なんd———」

ボタンッ!

がしゃん、がしゃん、がしゃん

……ピクッ……ピクッ……

顔から地面にダイブしていった雄二。
そして明久に向けられた視線の会話。

（毒を盛ったな？）

（いいや、これが姫路さんの実力だよ……）

（残念ながら……）

「たっだいまゝって、坂本！？ どうしたのよ？」

「す……少し足がつつてな。」

「ダッシュで階段の上り下りしたからじゃないですか？ ……本当に、気の毒に……」

「そう？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど……っていうか気の毒って？」

「きつと、トレーニングをさぼってたんですよ。きつと！ 駄目ですよ？ 雄二」

「あ、あ……今度から、きききおtkry」

雄二の言葉が辿々しく……いえ、もはや地球の言葉ではなくなってきました。

これを見た秀吉も、流石に勇気を無くしたようでした。

「（……些か仕方ありません。力を使って有害な物質を極力取り除いてみます）」

「（そんなこと出来るの？）」

「（やったことはありませんが……試してみる価値は充分あります）」

」

「（頼んだよ。絵里）」

「（頼んだぞい）」

「（……明久、1秒でも多く瑞希の注意をそらして下さい）」

「（了解）ああ！ 姫路さん、あれはなんだ!？」

「え？」

この隙に私は力を込めて有害な物質を取り除いていきます。

……っう……無理、です………!」

かくなる上は……

「ごめん、雄二!」

「もごあっ!？」

明久は私の何かを感じ取ったのでしょう。雄二の口の中に弁当を詰め込んでいきます。そして咀嚼を手伝ってあげて……

……いや、ちょっと……生きてますか？

「ごめん姫路さん。勘違いだったみたい」

「え？ そうなんですか……あれ？ もう食べちゃったんですか？」

「はい。とっても美味しかったですよ？ 特に雄二が美味しい美味しいって逝って食べてました」

因みに誤字ではないです。

「え？ 本当ですか!？」

「うん。とっても美味しかったよ。ねえ、雄二？」

「ああ、あり……がとな……」

でもその優しさが残酷なことになりますよ……

「あ、そういえば」

「どうしたのじゃ、姫路よ」

「じつは、デザートも作ってきました。」

「ああ、姫路さん！ あれは何だ！？」

「待て、明久！ 今度は俺でも無理だッ！」

「ちっ……」

鬼畜って言葉、知ってますか？

「……これならいけるでしょうか……」

デザートには硫酸しか入っておらず、幸いにも一種類の薬品であれば取り出せる私にとっては好都合でした。

取り出した硫酸は浄化して理科室の硫酸が入っている瓶の中へ。

……有害物質のない料理はとっても美味しかったです。

[illegible]

「ねえ、絵里」

「何ですか？」

「絵里は最初から震えていたって事は……最初から知ってたんじゃないの？」

「知ってましたよ？ でも言っても信じてくれないでしょうから言いませんでした」

「……当時と今、どっちがマシ？」

「前の方がマシでは無いでしょうか……？ ああ、悪化しましたね、あれは……」

「所でさ」

「何ですか？」

「まさかパンケーキ一口で三途の川が見られるとは思わなかったよ……」

「……同意、ですね」

翌日。

私と明久はサラサラと綺麗な水の流れるところで2人寂しく会話をしていました。

2 閑話「料理は危険な香り……らしい」(後書き)

来週からまた忙しくなりそうです(泣)

そういえば修学旅行シーズンだとか。

いやはや……修学旅行か、行きたいな。

学生の皆さん、楽しんできてくださいッ!!

3 閑話「明久の幸せを正しくつみ取る100の方法」

眠い。

それが今の私の気分です。

朝の登校時間。

私はいつものように学校に登校するだけでした。

空は雲が幾つか浮かんでおり、太陽も温かく道を照らしていました。

……ただ、悪魔がいなければ。

「……絵里、今度は逃がさない……!」

そう、この悪魔。

連日の如く現れるこの悪魔“達”に、私は恐怖せざるおえなかったのです。

Side

回想

— — — — —

「？ 美波？」

学校内Aクラス前廊下。

何気なく通ったそこには必死な形相をした美波と、何処か見たことのあるような女子生徒がいました。

『関わるな』

頭の中で警戒信号が鳴り響きます。

私は即座に行く方向を切り替えます。

「あら？ あなたは音橋絵里様じゃありませんか？」

「……何で私の名前を……？ とうか様って……」

「だって学年トップの恐るべき学力を誇っており、人望も厚く。容姿端麗、成績優秀、森羅万象を誇るあなたですし……」

森羅万象は流石にしていない。

「何より、男女問わず虜にしてしまう美しさ。これほどの女性を知らないはずがありませんわ！」

男女問わず？ 私にとっては不利益な情報ではありませんか？
とうか私よりもそっちの方が断然可愛いでしょう。

「ああ、確かに噂どおりあなたも魅力的な……」

取りあえず逃げましょう、さっきの警戒信号がますますあがってきます。

回想sideEND――――

――――

ということがあり、今では朝の日課になりつつあるこの鬼ごっこも……新たに鬼が加わることとなりました。

「！ 本当に人間離れしてませんか、翔子ちゃん！？ っていうか、いつの間に現れたんですか！ 清水さん！？ 美波でも襲ってくればいいじゃないですか！」

「美春のことは美春とおよび下さいませ！ そして、お姉様はすでに24時間どこで何をしようが把握できる準備ができています！」
「怖い！？ それはそれで、ストーカーされるよりも怖いですよ！？」

超能力を使って常人には出来ない動きや速さを作り出しているというのに、私はこの2人に随分と距離を縮められています。

っ……かくなる上は……

「翔子ちゃん！」

「……ちゃんは無しの方が良い」

もう私には、この人達が何を考えているのか分かりません。
超能力で読みたくもありません。

「この間、雄二が瑞希の方が優しくて好みだって言っていました！」
「……ちよつと行ってくる」

1人消えました！ 作戦は成功ですね……

残るのは……

「清水さん！」

「嘘です！ お姉様の情報をあなたが知っているはずがありません！
先ほども言ったように、私はお姉様の行動を24時間把握できていますので！」

「否定するの早くないですか！？」

ああ、もう……こうなったら振り切るしかないじゃないですか！

「さあ、美春と共に語り合おうじゃありませんか！ 同性愛の魅力についてを！」

「私にそっち系の趣味はありません！」

結局の所。私は何とか捲くことに成功し、何とか平穏を保つことが出来たのです。

「……おはようございます。明久、雄二……」

「ああ。お、おはよう絵里」

「ん、音橋か？珍しいな」

玄関に行くと少し動揺している明久と、珍しがっている雄二が居ました。

どうやら雄二はまだ翔子ちゃんに見つかっていないのでしょうか。すいません、雄二……私が不甲斐ないばかりに。

「い、いや、いい朝だねっ！　すごく良いことがありそうな朝だよねっ！」

「？　何を動揺して居るんですか、明久？」

「ん……？　まさか、さっき見えた手紙のようなものは………」

「た、ただのプリントだよ！　雄二、絵里！」

手紙ですか……

明久の場合は果たし状か、もしくは……ラブレター、とかですかね？

「まあ、別にいいんですけど……」

そう呟いてから下駄箱を開けます。

そこにはいつものように靴が入っているはずが、今日は別の物までもが入っていました。

靴の上に置かれた、綺麗な便せん。それが2つ。

「……何でしょう？」

1つ目は白い便せんです。

差出人の名前は書いてありませんが、表にえらく達筆な字で音橋絵

里様と書いてある所を見ると、私宛なのでしょう。

丁寧で封を開けて中に目を通していきます。

……………あれ？ あれれ？ あれあれ？

「…………ラブレター…………？」

驚愕しますね。

前世では1通も貰ったことのない、あのラブレターが実在するなんて…………いや、一部嘘が入ってますけど。

取りあえず中身に目を通すのを中止し、手紙を出した主の名前を探します。

こういうのは大抵下の方に書いてある物。

名前の部分が近づくに連れ自然と高鳴ってしまう鼓動を抑えつつも、私は差出人の名前を見ます。

『——あなたのことが本当に好きです。付き合って、下さい。』

Aクラス 佐藤美穂』

「……………女子ですか」

全力で崩れ落ちた私を見て明久たちが心配していたのを横目で見ながら、清水さんの言っていたことはあながち間違っていなかったなあっと、思いつつも残りの2通も女子であることを確認し終えると、

そんな矢先のことでした。

「坂本」

「……明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せええッ!!』

この事件はそんな雄二の一言のせいで始まったとは、今の私ですら気が付きませんでした。

「ゆ、雄二！ いきなり何てこと言い出すのさ！」

そう言う明久。小声だったのにもかかわらずクラスの皆さんは聞こえていたようです。

怒号が飛び交う教室。これがその証拠といえるでしょう。

その会話で分かった事はやはりFクラスは他人の幸せを許さないと言う事でした。

「お前らっ！ 静かにしろ！」

ですが、すぐに西村先生の一括がはいります。しかし出欠確認の前に先送りできない問題が発生していますね……

男子の殺気に負けじと瑞樹と美波から不のオーラが漂っていきます。それを知っているのかは分かりませんが、西村先生は出欠確認を続けます。

「手塚」

「吉井クロス」

「藤堂」

「吉井コロス」

「戸沢」

「吉井コロス」

「皆落ち着くんだ！ 返事が吉井コロスに変わってるよ！」

「吉井、静かにしろ！」

「事を荒立てるような真似をしないで下さい、明久」

「そ、そういう絵里だってラブレターを貰ってたじゃないか！ しかも女子から2通も！」

「ちょ、明久！？ 今はそれは関係な——」

思わず立ち上がりそうになったその時、

『何だってっ！！？』

つと、本日2度目の絶叫が教室に響きました。

「須川！ 相手の確認を急げ！」

「分かってる……よしっ、分かった！ 相手はAクラス佐藤美穂！」

「何！？ Aクラス戦のあの時か……！！？」

「2人目は、Bクラス里井真由子！」

「くっ、流石は絵里お姉さま。もう新しい女性を惑わしてしまうなんて……！」

「ムツツリーニッ！ カメラの準備は！？」

「……………もう、終わっている……っ！！」

ああもう！ この教室はどうなってるんですか！ というか須川君、あなたはそれをどうやって調べたんですか！？

……って、ん？ 何か今、聞こえるはずのない声を聞いたような……？

「って、美春！？ アンタなんでここにいるの！？」

「ああ、美波お姉さまのことが愛しくて、思わず来てしまいました！」

「ちょ、帰りなさいよ」

……………OH

「嫌です！ 絵里お姉さまの新しい女性との門出を、美春が祝わなくて誰が祝うと言うのです！」

「誰も祝わなくていいですからね？」

「お前ら、静かにしろといっただろう！」

西村先生の給料に、今月はこっそり少しだけ増やしておくことにしましょう。

「清水は自分の教室に戻れ。他の生徒も各自席に着け！ 出欠確認を続ける」

清水さんは渋々といった風で教室から出て行き、他の皆さんも一応席に着いたようですね。

「新田」

「とりあえず吉井はクロス」

「布田」

「だが音橋はどうする？ 百合は俺たち男子の入ってはならない禁

断の領域だぞ」

「根岸」

「まずは吉井をコロス。その後、暖かく見守ろう」

まず、付き合うとは誰も言っていないのですが。

そう考えながら、私は此処の男子をどう一掃するかを考えていました。

[illegible]

西村先生が教室から出て行った後。即座にアクションを取ったのは明久でした。

「で、どうする？ 明久の事だからトイレの個室で読むとかそういうことは思いつかないだろう」

「でしようね。おそらく明久は……下見も兼ねて屋上へ行くはずで
す。そこで待てば問題はないでしょうね……明久にはどんな死に方
をしてもらいましようか」

「絵里ちゃん、それは私に任せて下さい」

「と言うかお主ら。たかだか恋文程度でそこまで目くじらを立てんでも……」

秀吉、分かっていますね……

「違うぞ秀吉。俺は別に明久にラブレターが来たことに嫉妬してるわけじゃない」

「私ですよ。別にラブレター自体は気にしていません」

「じゃったら……」

秀吉が反論しようとしていますが、違うんです。

「簡単に言うそうですね、秀吉」

「ああ、俺たちは」

「？」

珍しくと言っていいほど、今日は雄二と気が合います。

「明久の幸せが、単純にムカつくんですよね」

「明久の幸せが、単純にムカつくんだ」

「お主ら、存外鬼畜じゃのう……」

私は同性。

明久は異性。

それはそれで悔しいのですが……ただ単純にそう言った小さな幸せにイラッとしたのは言うまでもありませんね。

さてはて、これからどうやって明久の幸せをつみ取りましょうか……

3 閑話「明久の幸せを正しくつみ取る100の方法」(後書き)

昔私が友人にやった

【正しい背骨クラッシュの方法】

- 1…相手を後ろから羽交い締めにする
- 2…相手の背中中心部分にそつと膝を宛う
- 3…膝を前へ、腕を後ろにやり、見事な背骨クラッシュの完成

というのをやっていました。

今では友人にからかわれるたびに「背骨クラッシュ」と呟くだけで相手が押し黙ります。

イエイツ (キラッ)

あ、ちょ、バットは良くないよ!？ え？ ちょ、釘バットなら良
いてワケでも (ry

「お前の幸せがむかつくんだよ」

「お前は最悪の友達だよ！！！」

そもそも、友達かどうか疑わしくなってくるよ！

雄二の説得は諦める。

ただし、次は絵里だ。

「絵里もそうだよ！　僕がラブレターを貰ったって、女子から2通もラブレターを貰ってる絵里には関係ないじゃないか！」

「……………確かに私は、瑞希と同じように嫉妬しているから…………明久に怒っているわけじゃありません」

「え、絵里ちゃん！？」

ようやく顔を上げて言う絵里に慌てふためく姫路さん。
何が違うんだろう？

「でもですね？　明久…………」

言葉が紡がれるたびに、次第に絵里の殺気が膨らんでいく。

「私は、同姓からしかラブレターが来ないのに…………明久が異性からラブレターを貰うなんて100年早いんですよっ！！」

「理不尽だっ！　理不尽すぎる！」

「え、あれって狙ってやってるんじゃないんですか？」

愕然として叫ぶ僕と場違いなことを言っている姫路さん。完全にただの八つ当たりだ。

そもそも絵里のは自業自得。男子達の告白を物の見事に撃破していくから…………。

「……………まあ良い、明久…………おとなしく手紙をよこせなんて野暮なことは言わねえ。本気でかかって来い」

雄二は制服の上着を脱ぎ、ネクタイをはずした。

改めて見せつけられる悪友の身体はしなやかで理想的な筋肉の付き方をしていた。

「姫路。上着を持っていけるか？」

「あ、はい」

姫路さんに上着を渡して身軽になった雄二は構えを取ってシャドーボクシングをしてみせる。

因みに絵里は隅っこで泣いていた。

[illegible]

「狙って……狙ってなんか、ないの……」

嗚咽を漏らしながらしくしくと泣く。

瑞希の一言が相当答えたらしく、私はほろほろと涙を流すしかなかった。

「雄一、勝負だ！」

明久が何か叫んでいます。

そして、瑞希の腕には2着の男子生徒用の上着が。

「瑞希、ちょっと明久の上着貸してください」

「え？ あ、絵里ちゃん。お帰りなさい」

……………あなたのせいですよ、瑞希。

私は明久の上着のポケットを探る。その中には案の定といった感じにとある物が入っていた。

「それで明久？ このポケットに入ってるラブレターは、私が貰って良いですね？」

「だ、ダメだよっ！？」 戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

「お前が馬鹿なだけだろうが！ やれ、音橋！ その手紙を始末するんだ！」

言われるまでもなく。

雄二が明久を羽交い締めに行っている間に私は封を切って中に目を通して……………あれ？

「……………瑞希、読みます？」

「いえ、私は別に……………って、あれ？ それってまさか……………!？」

やはり瑞希は戸惑います。

そしてその瑞希を明久は説得しようと試みていました。

「姫路さん」

「えっ!？ あ、はい。どうしたんですか？」

「僕には分かってるよ。優しい姫路さんは手紙に込められた人の気持ちを踏みにじることなんてできないってこと。だから、おとなし

く――」

「手紙を細切れにするんだ」

「違うっ！ そうじゃないよ！？」 雄二、卑怯だぞ！ そうやって

僕の台詞みたいにつなぐのは反則だ！」

「はいっ！ わかりました！」

「いや！？ はいっ！ じゃないよ姫路さんってああああっ！？

そんな丁寧に手紙を裂かなくても！ それじゃあもう絶対に読めないよね！？ 返してっ！ 僕の幸せな未来と大切なラブレターと6行前の台詞を返してえっ！？」

明久の叫びもむなしく地面にひらひらと雪のように落ちるラブレター！。

「まさか本当に姫路が破るとは思わなかった……すまん、明久」

そんな明久を見て何か思うことがあったのか、素直に謝る雄二。

それはそうでしょう。いつもの瑞希があんな事をするなんて思えませんし。

「はあ……念動力」
サイコキネシス

私もさすがに気の毒になったので、サイコキネシス念動力で元ラブレターの破片を集めます。

「せめてものお詫びです」

「ありがとう、絵里……最後の可能性にかけて、この紙くずをつなぎ合わせ」

「――未練を断ってあげます」

パキンッ

指を鳴らすと瞬時に燃え上がるラブレター。

「ふう……これでいいですよね？」

「いや、これでいいですよ？　じゃないよね！？　何この黒ずみ！　こんなになったらもう読めないじゃん！」

その黒ずみには私の力の半分ほどが込められている事はきっと知らないでしょうね。

「明久。明久は知らないと思いますけど……」

「え、何！？　これ、絵里にお金を積みめば戻るのかな！？」

「私、明久が幸せだと本当に腹立つんですよ」

「知ってるよバカ！　ちくしょー！」

あれ？　知っていたんですか？　明久の癖に。

「そういえば坂本君。手紙の主は誰だか気にならないんですか？」

「ああ。俺は明久の幸せが妨害できたらそれで良い。もっとも――」

「まあ、あそこまでやれば気付きますよね？　他人の書いた手紙を破り捨てるなんてするはずないですし」

「そ、それは、そのっ！？」

あの瑞希が他人の思いを綴ってあったラブレターを破り捨てるはずがありません。

その点に置いては明久の解釈も間違っではないです。

「あ、絵里！　その話、もっと詳しく！」

「よ、よよ吉井君は聞いちゃ駄目ですっ！」

「こぺっ！？」

「瑞希落ち着きなさい。明久の首が明後日の方向を向いてますよ？」
「ご、ごめんなさいっ!？」 私、大変なことを……」
「まあ気にするな。生かしておいてもあの連中に殺されるだけだろうからな」

「アゝキゝゝゝゝ? あんたよくもやってくれたわねゝ!」

「吉井っ! 絶対殺すっ!」

「ガンホー! ガンホー! ガンホーッッ!!!!!」

一体何をやらかしてきたんですか？

……さて、と……私は私でどうしましょうか？

— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —
— — — — —

夕暮れの校舎裏。

私は2人……佐藤美穂さんと里井真由子さんに向き合っていました。

……………なんですか？ この羞恥心……せめて、殺して下さい。

校舎の窓を見るとギャラリーが生暖かい目で見ています。

……………ちょっと待って下さい、康太。何でカメラを持っているんですか？

「あ、あの……！」

2人が同時に口を開きます。この場所へ呼び出したのはこの2人。大体用件が分かってるとはいえ、自分の思い違いだったらちょっと恥ずかしいので、黙って聞いている事にしましょう。

「……………やっぱり……だめ、かな？」

……………大体は分かっていたんですけどここまでの変化球でくるとはね？

考えてませんでしたよ？ いや、ちょっと落ち着いて。今、私の頭はフル稼働中です。その内容は……

————コレ……どうやって断りましょうか……………

「ええっと……べ、別に私はあなた方のことを嫌いって言うわけではありませんし……」

私は人に好意を抱かれるのはイヤじゃないので当然答えも曖昧なモノになってしまいます。

「ほ、ほら、やっぱり私たちって同姓な訳ですし……それってどう

「思いますか？」

ちょっと待ちなさい。そのDクラス池田君。『あれ？ お前狙ってやってたんじゃなかったの？』という顔は止めなさい。他の人もですよ。

佐藤さんも里井さんもそんなこと言われるなんて思ったなんて思っていないで口を開きなさい。

「それ、は……………」

此処で諦めてくれたらどんなに良いことか。

それでも彼女たちは私のことが好きで。決意を固めて、覚悟をして。この場所に立っている。

「それでも…………私は、貴女が好き」

「わ、私も…………だよ？」

おおッ！

完成の声がガラス窓越しに聞こえてきました。

康太？ それ以上シャッターを押し続けると命に関わりますよ？

「はぁ…………」

さて此処でカミングアウトッ！！

よく考えればこういう事初めてじゃないんですよね…………

小学校の頃も中学の頃もラブレターを貰ってましたし…………はつきり言うとか、あの頃だったら余裕でハーレムとか言うのも作れたんじゃないでしょうか？ でも全部のラブレター燃やしましたし、数なんて分かりませんけどね。

「でも……」

「え？」

今回は珍しく里井さんからですね。

「貴女が嫌だって言うなら……そんな貴方を悩ませてまで、付き合
って欲しいとは思わない」

「……」

なんて人間のできた娘でしょう。ちょっと好感度があがりました。
友達的な意味ですよ？

「それでも、私が嫌いじゃないなら」

そこで言葉を句切って言いました。

「真由子って、呼んでくれない？ それで友達になりましょう」

「……それなら良いかもしれませんね」

「じゃ、じゃあ、私のことも美穂って呼んで下さい！」

「勿論」

さて、ここで余談ではありますが、あの後起こった出来事をお話し
しましょう。

私と真由子さん達と握手を交わした直後、清水さんが結婚式の音楽

を流しながら登場し、さらには、翔子ちゃんもスタンガンを手にし
ながらこっちに登場しました。

当然私は逃げようと思いましたよ？　ですが、美穂達の「い、一緒に
いてくれないの？」という台詞＋涙目の上目遣いに気を取られてい
るうちに逢えなく撃沈しました。

それで、何とかメールアドレスと電話番号を書いたメモを美穂達に
渡した直後に意識を放棄しました。どうやって帰ったのかは分かり
ません……と言うのは冗談で、目が覚めたら私の部屋のベッドで、
翔子ちゃんと寝ていたんです。あの時は本当に何もされていないこ
とを祈りました。

そして、早速携帯を確認してみると2人そろってこんなメールが……

『さっきはああいったけど、私は諦めないから。絶対に貴女に好き
になっもらう』

……勘弁して下さいよ？

もうこれは、好意の云々じゃないですよ？　私を追いかけてくる
同姓が5人……5人ですよ？　いや、実のところ、女子にストーカ
ーされたとかそう言うこともあるけど、この話は別です。ど真ん中
ですよ？　直球ストレートですよ？　もう……今初めてと言っても
良いほど、神様を恨みます。

……明日からは、超能力の訓練もしておきましょう。最近は超能力
もあまり役にたたな——

サイコキネシス

今更ですけど念動力で、空を飛べば良かったです……

今度からは肉体強化とかの能力も練習してみますか……

明日から本当に苦勞しそうです。

4 閑話「此处で衝撃のカミングアウト」 (後書き)

「康太？ 覚悟は良いですね？」

この後はご想像にお任せ致します。(え

1 テスト（前書き）

音橋さんは現在寝ぼけています。

1 テスト

問・以下の英文を訳しなさい

This is the bookshelf that my
randmother had used regularly

姫路瑞樹の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

「★○△\$ㄣ#♪ー」

教師のコメント

出来れば地球上の言葉で

音橋絵里の答え

「これは、私の祖母の人生をすくった本棚です」

教師のコメント

どこをどうすれば人生を救うんでしょうか

問・以下の問いに答えなさい

「goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい」

姫路瑞樹の答え

「good — better — best
bad — worse — worst」

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

「good — gooder — goodest」

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。goodやbadの比較級と最上級は語尾に－erや－estをつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

「b a d － b u t t e r － b u s t」

教師のコメント

「悪い」「乳製品」「おっぱい」

音橋絵里の答え

「
」

教師のコメント

あぶり出しは止めましょう。

問・下の文章の（ ）に正しい答えを入れなさい。

光は波であって、（ ）である

姫路瑞樹の答え

「粒子」

教師のコメント
よくできました

土屋康太の答え
「寄せては返すの」

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え
「勇者の武器」

教師のコメント
先生もRPGは大好きです。

音橋絵里の答え
「目がちかちかするの」

教師のコメント
音橋さんは病院に行った方が良いのではないのでしょうか？

問・以下の問に答えなさい

「ベンゼンの化学式を書きなさい」

姫路瑞樹の答え

「C6H6」

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

「ベン+ゼン＝ベンゼン」

教師のコメント

君は科学をなめていませんか？

吉井明久の答え

「B—E—N—Z—E—N」

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

音橋絵里の答え

「C—————」

教師のコメント

6と書こうとしたときに何があったのですか。

問・以下の問いに答えなさい

「(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい。

$$\begin{array}{lcl} (2) & ? & \sin A + \cos B \quad ? \quad \sin A - \\ \cos B & ? & \sin A \cos B \quad ? \quad \sin A \cos \\ \sin B + \cos A & \sin B & \end{array}$$

姫路瑞樹の答え

$$\text{「(1) } X \parallel \pi / 6$$

$$\text{(2) ?」}$$

教師のコメント

そうですね。角度を「 $^{\circ}$ 」ではなく「 π 」で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

$$\text{「(1) } X \parallel \text{およそ } 3$$

教師のコメント

およそを付けてごまかしたい気持ちも分かりますが、これでは解答

に近くても点数は上げられません。

吉井明久の答え

「(2) およそ?」

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを付ける生徒は君が初めてです。

音橋絵里の答え

「(2) 確か? だったはずです……」

教師のコメント

音橋さんはどうしたのですか? いつもの音橋さんならとけるはずなのですが……今回はかりはまるで吉井君のようです。

問・以下の間に答えなさい

「女性は()を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める」

姫路瑞樹の答え

「初潮」

教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え

「明日」

教師のコメント
ずいぶんと急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達する頃に初潮を迎える者が多い為、その訪れつ年齢には個人差がある。二本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

教師のコメント
詳しくすぎです。

音橋絵里の答え

「処刑」

教師のコメント
字の間違いだと信じています。

問・以下の良いに答えなさい

「人が生きていく上で必要となる五大栄養素を答えなさい」

姫路瑞樹の答え

「脂質・炭水化物・タンパク質・ビタミン・ミネラル」

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

「砂糖・塩・水道水・雨水・湧き水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

「初潮年齢が10歳未満の時は早発月経という。また、15歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに18歳になっても初潮がない時を原発性無月経といいー」

教師のコメント

保健体育のテストは1時間前に終わりました。

音橋絵里の答え

「命・幸せな平穏・平和・核・その他諸々」

教師のコメント

あなたは本当にどうしたのでしょうか？ 前のテストでもこのような珍解答を目にしたのですが……

1 テスト（後書き）

次はいよいよ龍君登場の予感……

第10話「噂の謎のヤバイらしい転校生」

「転校生を紹介する」

HR。

西村先生は静かに言いました。

「お、女子か!？」

「いや。Fクラスに女子が4人いるだけでも珍しいのに、これ以上はないんじゃないか？」

「ワシは男じゃぞ!？」

周りがざわつきます。

確かに珍しいですね。この時期に転校生なんて……

「この時期に転校生なんて珍しいこともあるもんだね」

明久もどうやら同じ事を考えているようでした。

「まあ、この時期に転校してくるのも災難でしたけどね」

「それもそうだね」

「お前ら、静かにしろ!」

一括。

それだけ静かになった教室を見渡してから西村先生は『入ってこいと静かに言いました。』

入ってきた生徒の特徴は金髪碧眼。

整っていて、所謂イケメンという部類に入る顔立ち。

そう。あれは、あれはまるで、龍君の――

「今日から転入してきた、又那川さながわりゅうや龍夜です」

そう。まるで龍君みたいって

「龍君……………!？」

「よ。絵里」

「よ。絵里じゃなくて……………どうして此処に？」

「? 聞いていないのか？」

聞くなって……………もしかして

『「もう少しで多分転校生が来るだろうから、楽しみにね？」

「は? え、それってどういう――」

“じゃあね”

ブツツ……………』

「あれですか……………」

「多分な」

「それにしても龍君が来るなんて聞いてませんよ……………」

「あ、あの……………」

おずおずと声をあげたのは明久でした。

「なんですか？ 明久」

「2人の関係って何？」

「関係も何も、俺たちはいゴブハッ!？」

「龍君、殴りたいんですか？」

「……な、殴ってから言うか？ 普通……」

私たちの関係を言ったらみんなにぼこぼこにされますよ……主に龍君が。

「お前ら静かにせんか！ 又那川は音橋の後ろに座れ」

「はい」

よりによって、私の後ろなんですか……

「又那川。俺はこのFクラスの代表の坂本雄二だ」

「ん？ 俺は、又那川龍夜だ。龍夜って呼んでくれ」

「僕は――」

「こっちはバカだ」

「バカか。よろしくな」

「バカって言うな！ っていうか又那川君も乗らないで!？ 僕は

吉井明久だよ!」

「明久か。俺の事は龍夜で良いぞ」

「分かったよ」

みんなが次々と自己紹介していく中、私は1人溜息をつくこととなりました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

なんだかんだで、午前中の授業が全部終わり、今はいつものメンバーに取り囲まれているところです。

「お主らの関係はなんなんじゃ？」

「それコッペぽ！？ ……また、かよ……！？」

「黙っていて下さい。私たちの関係は——」

私だってただ憂鬱な気分で授業を受けていたわけではありません。

「——い、許嫁です」

「ああ、なんだ。許嫁——ってええっ！？」

『『『『なにいつ！？』』』』』

ううう……

「やっぱり、前に話しに聞いた許嫁って……」

「又那川君の事だったんですね……」

「ん？ お前らは聞いたことがあるのか？」

「うん。バレンタインの時にちよっとね」

あ、あれ？ 震えが止まらない……？

「少し落ち着いて下さい。異端審問会は駄目です」

バチバチィッ！！

『『『『ぎゃあああああああ!?!?!?!?!?!?!?!?!』』』』

スタンガンの電気をサイコキネシスで流します。

「な、何で俺まで?」

「ごめんなさい」

わざとです。

「なんで棒読み?」

「まあまあ」

わざとだからです。

「取りあえず今日は龍夜の歓迎パーティーでも開くか?」

「別に気にしなくても」

「良いんですって。じゃあ、私の家で良いですよ?」

「そういえば、絵里ちゃんの家って初めてです」

「僕も」

「そう言えば俺もだな」

「ウチもよ」

「わしもじゃ」

「……………同じく」

「私は何回か行った」

そう言えば友達を招き入れるのは初めてって……

「翔子ちゃん? どうして此処に?」

「……絵里の許嫁なら仲良くしようと思って」

「あ、君が霧島さん？ 初めまして。絵里から雄二とお似合いのカップルだって聞いている」

「……嬉しい」

雄二？ 何泣いてるんですか？

うれし泣きってやつですよ、はい。

「どこがお似合いのカップルなのか説明してくれ……」

「じゃあ今日の放課後私の家ですからみんなでいきましょうか？」

友達を招くのは初めてですから誰も私の家の位置を知りません。

……翔子ちゃん以外は。

「ドキドキしますね」

「うちもよ。音橋の家ってお金持ちなんだろう？」

「多分そうですね……」

「多分ってなんだよ。株で結構儲けてるじゃないか……」

「ええ！？ 絵里って株やってるの？」

「……初耳ですよ？」

「いや、趣味でやってたらなんか増えていきましたよ？」

「株で趣味ってどうなんだよ……」

面白そうだったからですよ。

それ以外では私は甘い物でしか動きませんよ。

「じゃあ、決定だな」

「いいのか？ 絵里」

「ここまで来たら成り行きです」

「……………ちょっと酷くね？」
「いいんです」

放課後 — — — — — — — — — — — — — — — — — —
— — — — — — — — — — — — — — — — — —

私の家を見た瞬間。

みんなが、絶句しました。

「絵里、コレ何階建て？」

「3階建てです。地下もありますよ」

「ふえ……………」

「さ、流石に流石すぎる……………」

どういう意味です？ 日本語が迷子になってましたよ、今…………

「まさかこの広さで……………メイドさんとかいないよね？」

「いませんよ……………掃除は超能力で何とかやっています……………それともメイドさん、いた方が良かったですか？」

「そ、そう言う意味じゃないよっ!!」

やっぱり明久は面白いですね。

家の玄関の前で私は鞆の中から鍵を取りだして鍵穴に差し込む。

「じゃあどうぞー」

『『『『お邪魔します!』『』『』』』』』

元気よく入ってくる今やお馴染みの面々。
靴を脱いで1階の居間に通す。

「広ッ!？」

「何畳あるんだよ……」

「適当に座って下さい。汚いところですが」

「どこがよ? ピカピカじゃない」

「そうですよ」

ふふっ。それはどうも。

「それじゃあ料理の準備とケーキの準備でも始めましょうか?」

制服の裾を腕まくりして準備をします。

「あ。それなら僕も手伝うよ」

「それなら俺も」

「……………手伝う」

「そうですか? ありがとうございます」

これで下ごしらえも充分楽に――

「なら私もお手伝いしましょうか?」

――悪魔のささやきが聞こえた。

「」「いや、女子は座ってていいから」「」

「私は材料とかの位置を教えたりしますね。瑞希、美波、翔子ちゃん！ 秘蔵の写真を見ても構いませんから大人しく座って下さいね！ 秀吉と龍君にはゲーム貸しますから！」

「分かったのじゃ！」

「？ ああ、分かった？」

リビングの戸棚からごそごそと漁り、適当な物を出します。

パラパラと軽く見てから安全なことを確認して瑞希達に手渡します。秀吉達にはテレビゲームを起動し、適当なカセットを渡しておくことにしましょう。

……さて。

「瑞希、美波、翔子ちゃん。龍君がこっちに来ないように見張っていて下さい。お楽しみですから」

「分かりました」

「任せて」

「……絵里の頼みなら」

「ありがとうございます。それじゃあ私は」

そう言って私は台所に向かいました。

やっぱりケーキは欠かせませんよねっ！！

いつも以上に張り切りながら、エプロンを身につけました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「お待たせしましたー！」

料理を載せたお盆を片手に、私は勢いよく扉を開けました。

「出来たのね」

「美味しそうですね」

「……流石」

そこまで褒められると嬉しいですね……。

「今日は龍君の好きな和食で纏めてみました」

「第二陣来たぞー」

料理を運び終えて、いざ。

『『『『『いただきまーす！』『』『』『』』』』』

元気なかけ声と共に料理に手を付け始めます。

今回のメインは手巻き寿司。お手軽素材で沢山楽しめます。

色とりどりの野菜が素朴な色の食材を彩り、オレンジジュース、林檎ジュース、葡萄ジュースなどがそれぞれの前にそっと置かれています。

さて……と。

「翔子ちゃん？ 何故私のジュースだけがこんなに毒々しい色をしているんです？」

「……怪しい薬なんて入ってない」

「ほう……」

「……入ってない」

「そうですか。じゃあ私は新しいコップとジュースを持ってくることにしましょうか」

「……とても残念」

食事も終え、一息入れている所。

「そう言えば2人は許嫁なんだよね？」

「そうですね……私達は昔からの幼なじみですし、結婚とかそう言うのは考えていませんよ。私自身結婚なんて想像できないですし。それに許嫁といっても親が勝手に決めただけですしね」

「……そうだな……」

声のトーン落ちてません？

「まあ私にとっては実験台とか、その程度でしか龍君を捕らえてませんし」

「「酷ッ!？」」

——あはは。

それだけ笑っておくことにしました。

翌日。

龍君は問答無用で異端審問会に連行され、私と言えば清水さんに追いかけて回され、美穂と真由子から追いつめられる始末。

どうやら、平凡な日々はまた遠のいたようで。

いつも通りの騒がしい日々が、また動き出しました。

第10話「噂の謎のヤバイらしい転校生」(後書き)

タイトルに意味はないッ！
どうも、作者です。

ではご報告をば……

14, 933アクセス 3, 320人

はい。ご存知の通りのPVとユニークです。

……………うん？

あれ？ 可笑しくないか？

「何を言ってるんですか……皆さんが見に来てくれるのに……」
「絵里の言うとおりでぞ？」

絵里、龍夜……だって、今回のを入れてまだ17話だったのに何で
総合評価が80も……

「……………まさかそこまでとは思っていませんでした」
「だが他の作中には全く及んでいないな……」

ま、まあわわわわ私？ 俺？ は変える。帰る。

「何を変えるんですか……」

じゃ、じゃあね！

「アレ挙動不審ってますね……」

「おいおい、アレって……あ。犬に噛まれた」

「うわ……それでも気付かないで……」

「あ。転んだ」

次回をお楽しみに！

「次回の押しつけだけしっかりやっていたぞ」

「作者の鏡……ではないですね」

第11話「清涼祭。ホールor厨房？」

桜の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

私たちの通う文月学園では新学年最初の行事である清涼祭の準備が始まりつつありました。

クラスの出し物もそれぞれの特性を活かした物や、興味本位といった具合に開かれる物も多い中。

私達Fクラスはというと――

「明久！ こいつ！」

「勝負だ龍夜！」

――野球をやっていました。

私はというと、そんな様子を屋上から眺めるだけという見事な怠惰っぷりを発揮しています。

「……今日は良い天気ですね」

重たいまぶたを軽く擦りながら身体を起こします。

教室には最近物にした催眠術を使ってダミーをおきました。

「貴様らっ！ 学園祭の準備をサボって何をやってるか！」

「げっ！？ 鉄人！」

「逃げろっ！」

どうやら先生に見つかった様子。
私もそろそろ戻りますか。

教室――――
――――

「さて諸君。そろそろ春の学園祭、清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

野球も中断され、私も教室に戻ってきてすぐ。

Fクラスの代表である雄二は、私達を見下ろしながら告げました。

「――とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。
そいつに全権をゆだねるので、後は任せた」

「あれ？ 投げやりすぎじゃね？」

思わず声に出してしまう龍君。

確かに、心の底からほれられるような投げやりっぷりですね。

……………ですが。

その気持ち、分からないわけではありません。試召戦争では勉強が出来なくてもここまでできる、ということを証明したかったのにもかかわらずこの体たらく。別に設備に不満があるというわけではな

かったので、特に何も言いませんが。

「……………ただし、この売上げの一部でも貰えるのなら、設備向上のために……………」

まあ、私が介入すれば一瞬でミカン箱が卓袱台になるんですが。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「つと、そんなことを考えているうちに美波が指名されたみたいですね。適任です。」

「ウチがやるの？ うーん……………ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

「雄二？ 実行委員なら、美波より姫路さんや絵里の方が適任なんじゃないの？」

「え？ 私ですか？」

「私もですか？」

突然の使命。

しかし、私はそれに答えるつもりはさらさらありませんよ。

「無理ですね。私ならともかく、瑞希だと全員の意見を聞いてるうちに時間切れになります」

ミカン箱にバランス良く体重をかけて潰さないよう口を開きます。

「じゃあ絵里がやれば？」

「興味のないことにはやる気が出ません」

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

そういつて小さい手を握りしめる瑞希。

確か……召喚大会の優勝商品は『白金の腕輪』と如月ハイランドのプレオープンペアチケットでしたね。

………私はそう言うのはいらないので、残念ながら出場はしません。

（ふふふ……絵里。悩んでるの？）

「っ！？」

後ろを向くと美穂がそこにいた。

私に気配を感じさせずに近寄るなんて……なんて無駄に高い技術なんでしょう。

取りあえずテレパシーで……

（……何ですか？ 美穂？）

（んっとね。絵里が他の男子や女子とイチャついている様な感じがしたから来たんだけど……気のせいだったみたい）

どんな感じなんですか、それは。

（一応聞いておくけど、絵里は姫路さんには興味はないよね？）
（はい？）

いきなり何を言い出すんですか……

私は転生前も今も女性に恋心を抱いたことはありませんよ。

（別にそんなことはありませんよ）

（そう、それなら良いんだけど。で、私から提案で……召喚大会にでない？）

（話を聞いてください……それに、お誘いはありがたいんですけど、今回は何か大変なことになりそうなので遠慮して――）

（ちなみにエントリーはもう済ませてあるよ？）

（拒否権はなしですかっ!?!）

本当恐ろしい行動力です。私なんてその行動力のせいで涙目ですよ？

（それじゃ私はこれで）

（え、ちよっ、カムバック!?!? カムバーックッ!?!?）

そして音もなく去ってしまいました。冷静だとムツツリーニみたいですね……。

ずっと、黒板の方に向き直ると、そこには新たに何かが書かれていました。

『候補?・・・吉井』

『候補?・・・明久』

どちらとも明久なのは何故でしょう。

「ほらほら、アキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることになったんだから前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされてる気がするよ……」

……もしかして、清涼祭の実行委員ですか？

まあ、確かにそれは貧乏くじですが……

さして……少し眠くなってきたことですし、寝ることにしますか。

— — — — — side — — — — —

「絵里？ 絵里！ 起きて！」

気が付いたら絵里が寝てた。

ミカン箱の上で寝るなんて、
何てバランスが良いんだろう。

……寝顔は僕の心のアルバムに記録されている。ムツツリーニは鼻血を出して戦闘不能だから、写真は期待していない。

「……ん？ ……寝てみたいですね……ごめんなさい。出し物、決まったんですか？」

雄二よりはやる気があるみたいだった。

流石絵里。

「ん。中華喫茶だって。絵里はホールと厨房、どっちが良い？」

一応絵里には聞いておく。雄二は別にいいや。アイツはアイツで適当にやるだろうしね。

「んー、どっちでもいいですけど……どっちもおもしろそうですし、掛け持ちでお願いします」

「わかった。えっと、絵里は掛け持ち……っと」

「掛け持ちって大変だぞ？ 良いのか？」

「龍君には関係ないじゃないですか」

手帳にメモしておく。僕の記憶力じゃ覚えてられないし。っていうか、夫婦喧嘩はよして欲しいな。

「それじゃあ私は厨房班に――」

「ダメだ姫路さん！ キミはホール班じゃないと！」

危ない。流石にクラスの設備がかかっているのに客が全員食中毒なんて事態はシャレにならない。

絵里が心なしか凄く震えている。

「（明久、フアインプレーです！ あんな惨劇はもう2度と……！）」

「……………！（コクコク！）」

「？」

絵里からは、テレパシーとムツツリーニからのアイコンタクト。

あの2人はその威力を身をもって知ってるしね。心なしか、一番の犠牲者である雄二も寝ながら震えているように見える。まあ、龍夜が姫路さんの料理のひどさを知らないのは当然だよな。

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

自覚症状が一切無い死神は可愛らしく首をコテンとかしげた。

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益がゴハッ!? み、美波! 僕の背中
はサンドバックじゃないよ!？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言うなら、ホールで“も”
頑張りますね♪」

出来ればホールだけで頑張って欲しい。

「アキ、ウチは厨房にしようかな♪」

「うん。適任だと思う」

「……………」

「それならワシも厨房にしようかの」

「秀吉、何を馬鹿なこと言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、
もちろんホールに決まってミギヤア! み、美波様! 折れます!
背骨が! 命にかかわる大切な骨が!」

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

こんなドタバタの状態で、僕達Fクラスの人並みの学園生活をかけた
学園祭は幕を開けることになった。

姫路さんのためにも此処は精一杯やらないとな……

そんなことよりも美波? その手に持っているカッターはどうした
の?

え? ちょ、ま、

第11話「清涼祭。ホールor厨房？」（後書き）

え？ 龍君の台詞が少ない？

仕方ないじゃない。だって影が薄いのが龍君だっはあっ!？

「クタバレコノヤロウ」

ちよ、ま……ええ!？ だ、誰か助け――

「ヒヤツツハアアアアア!！ 汚物は消毒だアアアア!！!！!」

それは言っちゃだめええええええええええ!！!！!！!！!！!

第12話 「危機は唐突に訪れる」

「アキ、絵里、ちょっと良い？」

普段の何気ない日常の1コマ。

帰りのHRも終わって、特に予定もなく帰ろうと考えていた放課後。随分と思い詰めた表情の美波に呼び止められました。

「何か用ですか？」

「用って言うか、瑞希について相談なんですけど」

……どうやら、冗談などではなさそうですね。

「相談？ 僕たちでよければ聞かせて貰うけど」

「右に同じくです」

「うん。ありがと……多分、アキに言って貰うのが1番手っ取り早いと思うんだけど——」

そういつて、美波は小さく息を吸って言いました。

「その、やっぱり、坂本をなんと学園祭に引っ張り出せないかな？」

「「無理」^{です}」

「って、即答！？ ちゃんと用件を聞いてから言いなさいよ！」

「実行委員を決めるときの投げやりっぷりから無理だって分かるだろ、普通」

「そうですよ。龍君の言うとおりで……あれ？　いつの間に？」

「ついさっきだ」

何という無駄な技術を……

………最近まともな人がいなさすぎませんか？

「龍夜の言うとおりでだよ。雄二は興味の無いことには徹底的に無関心だし……」

「でも、アキが頼めば動いてくれるよね？」

美波？　何故そんなに目を輝かせているんです？

「え？　別に僕が頼んだからってアイツの返事は変わらないと思うけど？」

「ううん。そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって——」

………？

「そりゃ確かによくつるんではいるけど、だからといって別に——」

「——だってあんた達愛しあってるんでしょ？」

「——もう僕お婿に行けないっ！」

………そう言えばそんな噂が流れていましたっけ。

近々漫研の方が同人本を出すとか出さないとか……

「明久。とりあえずお婿には行けますよ？」

「え？　それって、もしかして絵里が——」

「大丈夫です。明久の運命の人はちゃんとしっかり三途の川原にいるじゃないですか」

「それってもう死んでるよね!？」

「え? 脱衣婆ですよ?」

「もっと酷いよ!」

脱衣婆 読み方「だつえばあ」

三途の川原におり、死にかけの人の身につけている服をはぎ取り白装束を着せて地獄に引きずり込ませる。

妖怪。

「それに、誰が雄二や脱衣婆なんかと! だったら僕は、断然秀吉の方が良いよ!」

「……………あ、明久?」

声のする方向を見ると、そこにはお約束通りといっても良いタイミングに秀吉がそこにいました。

「そ、その……お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われてもワシらには色々と障害があると思うのじゃ……その、ホラ……歳の差とか……?」

「落ち着いて下さい秀吉。明久は同学年ですし、愛に年の差なんて関係ないって言いますよ?」

「え、絵里……」

「つつこむところはそこじゃないよ!? 秀吉も凄い誤解だよ!」

さっきのはただの言葉のアヤで!」

明久が必死に秀吉に教えていますが、まだ秀吉の顔は真っ赤ですね。

面白いです。本当に見ているだけなら面白いです。

「それじゃあ坂本は動いてくれないって事？」

「え？ あ、はい。そうなりますね」

「普通に考えてもそうなるだろう？」

「でも、何で雄二を呼ぶのさ？」

まだそんな話続いてたんですね。秀吉と明久がおもしろすぎてすっかり忘れていました。

まあ、動かそうと思えば動かせるんでしょうが。

「あのね、本人からは口止めされてるんだけど……このままじゃあの子、転校するかもしれないの」

一息置いて告げた美波。

「へ？ て、転校……？」

「美波、その話もうちょっと詳しく」

「む？ 絵里、明久が処理落ち仕掛けとるぞ？」

「明久は、こういうときに弱いんだな」

「もう、明久？」

「秀吉は、モヒカンになった僕でも好きでいてくれるかい？」

「どうしたらそういう考えに行き着けるのか教えてほしいですね」

「ある意味スゲェな」

本当にある意味。ですけどね。

「美波、姫路さんが転校ってどういうことさ！？」

どうやら無事に戻ってきたようです。

「どういうこともなにも、このままじゃ転校するってことよ」
「このままじゃ?」

「島田よ、それではさっきの話とはつながりがないのではないかう?」

……………いえ、

「……………大体の見当はつきました……………」

「……………瑞希の転校するかもしれない理由は、「Fクラスの問題?」……………ご名答よ」

「それってどういう意味?」

「簡単に言えば、だ……………体の弱い姫路がきのことかカビが生えた設備で体調を崩さずに学園生活を遅れると思うのか?」

「思わない」

「だろ?」

龍君の分かりやすい説明に明久は糸も容易く理解したようです。

「………つてことは、転校の原因は両親の仕事とかじゃなくて設備のせいってこと?」

「そうです。恐らく瑞希は召喚大会でお父さんを見返してやろうと試みてるそうですが……………やはり根本的問題を解決しないと、また転校なんて話になりかねませんね」

「そう言うことだったら力になるよ。霧島さんに聞けば一発じゃないかな?」

……………ああ。翔子ちゃん。

「そうだな。さっき霧島が雄二のこと追いかけてるのみたぞ」

「それは今すぐかけた方が良いでしょう。息の根が止まる前に」

「いやいや、かけなくても大体居るところくらい分かるよ？」

「え？
どこですか？」

「じゃあ、絵里もついてきてよ」

「わかりました」

私は半信半疑のまま明久について行くことにしました。

[illegible]

「やあ雄二、奇遇だね？」

「……本当に、いたんですね」

「どうすれば女子更衣室で会うのか教えて欲しい。それと音橋。蔑んだ目でこっちを見るな」

いえいえ。

まさかこんな所に単身で乗り込んでいるなんて思いませんか？

「あれ？ Fクラスの問題児コンビ？ え？ ここ女子更衣室だよ」

「絵里ちゃんいるし」

「あ。木下さん、奇遇だね」

「おう、秀吉の姉さんか、奇遇だな」

「優子さん。本当に奇遇ですよね？」

「あ、うん。奇遇だね」

朗らかに笑いあう私達。

けれど、どちらも目は笑っていませんよ？

「先生、のぞきです！」

「明久、逃げるぞ！」

「了解っ！」

「なにぃ！ 吉井に坂本だど！？」

西村先生の声が聞こえた瞬間、女子更衣室の小窓から逃げていく2人。

そして私はこの後当然の如く……

「坂本君と吉井君が入ってきたんだね？」

「え？ あ、いいえ。雄二が最初から入っていたんです」

「何もされなかった？」

「だ、大丈夫です」

この通り事情聴取をされました。

……あの後の女性の先生方の慰めが凄かったのには流石に涙目になりました。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

事情聴取と慰めが終わり、教室に帰ってくると明久と雄二が居まし

た。

どうやら逃げ切れたみたいですね。

「そうか。姫路の転校か」

「ただいまです」

「絵里お帰り。今までどこにいたのさ？」

「あなた達のことです。事情聴取を受けていたのですが？」

「……………ごめん（すまん）」

事情聴取の言葉を聞いたのか素直に謝ってきました。

いえ。寧ろ土下座して欲しいほどなんですけど、そこまでするほど私も鬼ではありませんよ。

……………多分。

「それで、何て言ったの？」

やっぱり、自分の身が掛かっていると知っておそろおそろ聞いてきますね。

まあ事情聴取で私が下手なことを言えば自分の立場が悪くなるんですから。

「大丈夫ですよ。明久と雄二は——」

私は満面の笑みで言ってやります。

「——西村先生の補習のフルコースになりました」

「「最悪じゃーっ！」」

ふふっ。

因みにコース名は『西村先生特別補習Ⅱ血の鉄拳フルコースⅡ』だそうです。

「それよりもどうなんですか、雄二？」

「ん？ ああ……多分、そこまでくると喫茶店の収入だけなら無理だろうな」

「無理ってどういう事？」

「そこからは俺が説明しよう」

龍君の数少ない出番といったところでしょかね？

「姫路の父親が転校をしようとした要因は恐らく……と言うよりも確実に3つだ」

「3つ？」

「ああ。1つ目はござとミカン箱といった酷すぎる設備。快適な学習環境ではないのは明白だ。だが、この辺は喫茶店が成功したときの利益でなんとまかなえる。いざとなれば、俺や絵里が金の方は何とかしてやる」

「え？ 絵里はわかるけど、どうして又那川がお金を出すのよ？」

「そこは納得しないで下さい……それと。龍君はこう見えても又那川グループの御曹司なんですよ？」

『『『『ええーっ！！！！！？？？？』』』』』

知らなかったことに驚きですね。

「龍夜って御曹司だったの！？」

「又那川と言ったら日常でよく使う製品から、衛星までつくつとるあの大企業会社じゃぞ！？」

「ああ、そうだけど？」

「あんな龍夜！ それはとっても凄い事なんだぞ！？」

「そういうもんか？」

「……ウチ、もうなんかばかしくなってきたわ」

「奇遇だね……僕もだよ」

「というか名字で気付きましょうよ」

又那川なんて結構珍しい名字ですし。

「まあ話を戻しましょう。龍君、続きをお願いします」

「ああ。2つ目は老朽化した教室だ。こっちの方は健康に害のある学習環境ってことだ」

「うーん……ッてことは1つ目が道具で、2つ目は教室自体って事？」

「そうですね。コレに関しては流石に喫茶店程度の利益では足し程度にしかありませんね。しかも、教室全体の改善となれば学園側の協力が不可欠になりますし」

これ位の優しい説明であれば明久もついてこれる様子。

なので私はもう少しだけ話を噛み砕きながら説明することにします。

「最期の3つ目はレベルの低い……用は、頭の悪いクラスメイト。

競争相手が居ない姫路の成長促すことの出来ない学習環境と言ったところだな」

「参ったね。問題だらけだ」

「確かにそうですね」

此処まで揃ってしまおうともう手がうてなくなります。

前者の2つは良いとしましょう。しかし頭の悪いクラスメイトはどうしようもありません。

「そうじゃな。1つ目だけならともかく、2つ目と3つ目は難しいのう」

「いや、そうでもない。3つ目の方はすでに姫路と島田で対策を練っているんだろう？」

そういえば、そういう風なことを言っていましたね。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見せ物にされるだけの嫌な大会だと思ったけど、あそこまで必死に頼まれたんだから引き受けなくちゃね？」

召喚大会……？

「あ！ 言うの忘れてたんですけど」

「「「「「？」」」」」」

「私も、召喚大会に出るんですよ」

『『『『『ええっ！？』』』』』

「どうしてでるの？」

「いや……そのですね？ ……無理矢理、美穂に……」

「……それ以上追求したらなんか危ないところに出ちゃいそうなんだけど」

「うむ。ワシも遠慮しておこうかの……」

「私だって好きでやってるんじゃないです……」

「音橋、同じ立場として同情する」

「同じ立場じゃありません！ っていうかなりたくないです！」

はあ……平和な日常が離れていく気がしてなりません。

「で、話は変わるんだが2つ目の問題はどうするんだ？」

「やっぱり学園長を説得するしかないだろ？」

「それだけ？　僕らが学園長に言っただけで何とかしてくれるのかな？」

「あのな……ここは教育機関だぞ？　いくら方針とはいえ生徒の健康に害を及ぼすようなら改善くらい許可してくれるだろ」

「あ、そっか」

「バカですね」

「バカだな」

「バカじゃな」

「バカだ」

「バカね」

「みんなでバカって言うな！」

ただし。

それを改善させようとしなのが学園長ですがね。

「雄二。私も一応いった方が良いんですか？」

「ああ、頼む」

「ここは一肌脱ぎますか！」

「任せたよ！」

「明久には言われたくないですね」

「酷いっ！　なんか、いつもより酷いよ！？」

こうして、私たちは学園長室に向かって走り始めました。

学園長が許してくれると良いのですが……

第12話「危機は唐突に訪れる」（後書き）

タイトルに『第〇〇』を付けるのを忘れていたので付けておきました！

漸く2巻に突入した本作！

しかし、クリスマスにはその季節にあった閑話を書けるのか！？
そして、年末を超えて押し寄せる大量の仕事は果たして乗り越えられるのか！？

ま、そこそこに頑張っていきます。

次回をお楽しみにっ！！

第13話「学園長室」

「……………賞品の……………として隠し……………」

「……………こそ……………勝手に……………：如月ハイランドに……………」

新校舎の一角に構えられた大きめのドア。
これぞまさしく学園室の扉です。

……………先ほどから扉の向こうで誰かが言い争いをしてるようですが
……………どうしたんでしょうか？

「どうした？ 明久、音橋」

「いえ、中から誰か言い争っているような声がするんですけど……………」

「僕も聞こえるよ」

「そうか、それじゃあ中に学園長が居るって事だな。よかったじゃないか無駄足にならないで」

「言い争ってるって言うてるのに行くんですね、雄二は」

「失礼しまーす」

私の忠告も空しく、雄二は中に入っていました。

「本当に失礼なガキ共だねえ。普通は返事を待つもんだよ」

学園長に賛成です。

学園長である藤堂カヲル学園長。

この試験召喚システムの開発中心となった人であり、それでいてこの巫山戯たクラス設備を儲けた人でもあります。

「やれやれ……取り込み中だというのに飛んだ来客ですね。コレでは話を続けることも出来ません………まさか、あなたの差し金ですか？」

今のは竹原先生——教頭先生です。

眼鏡をしていて、鋭い目つきとクールな態度で一部の女子には人気が高い。

そういう統計が出ているので、強ち間違っではないのでしょうか。

「バカを言わないでくれ。どうしてアタシがそんなセコい手を使わなきゃ行けないのさ。負い目があるというわけでもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

話の内容は分かりませんが、言い争いが続いています。

明久くらいだと経営についてとかそう言うのしか思いつかないんでしょうけど、明らかに違いますね。

「さっきから言ってるように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

「……そうですか。そこまで否定されるのならこの場はそう言うことにしておきましょう」

教頭先生は学園長室の隅を横目に確認してから、

「この場は失礼します」

それだけを言ってパタンと扉を閉めました。

……へえ。成る程。確かにさめざめとした応対ですね。ほれぼれしますよ。

「んでガキ共。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつてきました」

……雄二が………敬語……！？

「私は今そこどころじゃないんでね。学園の経営に関するものなら教頭の竹原にいいな。それと、最初に名乗るのが社会の礼儀ってもんさね」

「2年Fクラス所属。音橋絵里です」

キチンと整った礼節に営業スマイル。

人の印象は僅か5秒で決まってしまうのですから、驚きですね。

「ああ、アンタが情報のファルコンかい？」

「え？ あ、はい？」

「その様子だと本当にそうらしいね……まあ、いいさね、アンタらは？」

「Fクラス代表の坂本雄二でコイツが――」

雄二は大きく息を吸い込んで言いました。

「2年を代表するバカだ」

「ちょ、雄二！？ バカとは失礼な！ それで僕の名前が分かるわけ――」

「ああ、アンタらが吉井と坂本かい」

「何で知ってんの！？」

明久の名前は職員室で凄く人気です。

主に悪い意味ですが。

「気が変わったよ。話を聞いてやろうじゃないか」

「ありがとうございます」

「礼なんか言ってる暇があるなら早く話しな、ガキ」

「わかりました」

雄二が罵倒されても顔色を変えないのを初めて見ました。

「どうか学園長。あなたさっき礼儀がどうこうって言ったばかりじゃ……？」

「今日はFクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいさね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

雄二、頑張りなさい。

「学園長のように弥生時代から生きている老いぼれならともかく、現代の高校生にはこの環境は健康に害をもたらす危険が非常に高い状態です」

アウトです！ 完全にアウトです！ レッドカード！！

「ようするに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババアというワケです」

最後に敬語を付けても暴言は暴言です、雄二。

「あの、学園長……？」

明久が流石に今のはやばいと思ったんでしょうね……まあ、でも学園長なら……

(……………ふむ、丁度いいタイミングさね)

「そうさね。ガキ共の言いたいことはよく分かったさね」

「それじゃ、直してもらえらってことでいいんですね？」

「却下だね」

「雄二、今すぐこのババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「明久。甘過ぎですよ……どうせならこの煉獄帳の餌食にしてからの方が……」

私はポケットから煉獄帳を取り出します。

タイトルは【竹内の真実】に引き続いて【カヲルの花】です。

「……お前ら。もう少し態度には気を遣え」

雄二にだけは言われたくないですね。

「このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「今すぐお願いします、学園長！」

因みに上から雄二、明久、私ですよ？

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思っているのかい？」

学園長が呆れ顔で明久たちを見ます。

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、青臭いガキどもが」

残念ながらそれには口答えできません。

確かに私達は入学当初にそれを説明された上で入学をしているのですから、今更文句の付けようがありません。

「それは困ります！ そうなると、僕らはともかく身体の弱い子がたおれちゃって——」

「——と、いつもなら言っているんだけどね」

……？

「可愛い生徒の頼み……こちらの頼みも聞くなら相談に乗ってやろうじゃないか」

流石は学園長と言ったところですね……

タダでは話を聞かないと。

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、もちろんじゃないですか」

「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」

「？ 優勝賞品？」

明久が首をかしげるのは無理もないでしょう。元々興味が無いという顔をしていますから。

「優勝賞品には確か正賞と副賞がありましたよね。正賞は、『白金の腕輪』が。副賞には『如月ハイランド プレオープンプレミアムチケット』が用意してあるんです」

ペアチケットと聞いて雄二の顔が青ざめます。

まさか、翔子ちゃんとくだらない賭をしてるんじゃないでしょうか？

「それと交換条件に何の関係があるんですか？」

「話は最後まで聞きな」

「しょうがないじゃないですか……明久はバカなんですから……」

「酷いよ絵里！？　それで学園長が認めるわけ——」

「確かにそうさねえ……………」

「酷いですよ！　学園長!？」

「それでこの副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「あれ？　無視？　無視だね？　これ？」

「回収？　それなら、賞品に出さなければいいじゃないですか」

「そうできるならしているさ。けどね、この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更取り止めにするわけにはいかないんだよ」

そう言えばさつきも言っていましたね……

教頭に学園の全てを任せるなんて、賭けも良いところですよ。

「つていうか、そう言うことなら契約する前に気付いて下さいよ」

「うるさいガキだね。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「それで、悪い噂ってのは何ですか？」

学園長は一呼吸置いて言いました。

「如月グループは如月ハイランドに1つのジnkスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジnkスをね」

「？　そのどこが悪い噂なんです？　良い話じゃないですか」

「そのジnkスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやってきたカップルを結婚までコーディネートするつもりらしいんだよ。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

オー、ノー。

「な、なんだと!？」

「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

「慌てるに決まっているだろう！　今ババアが言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ!？」

「う、うん。言い直さなくても分かるけど」

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけですよ」

「くそっ。うちの学校は何故か不細工がいねえし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな……」

「え？　どうということ？」

明久はやっぱりバカでした。

「……まあ、簡単に説明すると世にも珍しい学校の学生が結婚まで行けばジnkスになるでしょうし、噂としては申し分ない。そして、雄二には翔子ちゃんが居る……」

とどのつまり、この学園の生徒達は利用されると言うことだ。

無論雄二もそのうちの1人であることに間違いはありませんが。

「ふむ。流石は神童や人工スーパーコンピューターと呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

学園長の言葉に、私は顔を少し険しくした。

「え？人工スーパーコンピューターって？？？」

「今は、情報のファルコンです。昔の名前で呼ばないで下さい。それ結構嫌なネーミングセンスですし……」

明久が頭の上に疑問符を浮かべていたけど、私の言葉を聞いてすぐに「ああ……」という顔をします。

「そうかい。それはすまなかったさね」

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことでもないし、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

どのみち翔子ちゃんがスタンガンで連れて行きますよ。

人生の墓場という名の結婚式まで。

「……絶対にアイツは優勝をねらってくる……行けば結婚。行かなくても『約束を破ったから』と結婚……俺の未来は……！？」

「どうしたの、雄二。まさか、約束を破ったら霧島さんの婚姻届に判を押す、なんて約束をしちゃったとか？」

明久が鎌をかけたみたいですね。

「……明久。笑えない冗談はよしてくれ……」

自業自得ですね。そのまま。」

「ま、本人の意志を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

さっきから思い切り罵倒していたのはどこのどなただったのでしょうか。

「つまり交換条件ってのは――」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら教室の改修くらいしてやろうじゃないか。無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも駄目さね。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

……何かが引つかかるんですが……

「つまり僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上を約束してくれるんですね？」

「何を言ってるんだい。やってやるのは教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

明久。そればかりは図々しいにもほどがありますね。

「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやってもいいじゃないか」

「そこをなんとかオマケして設備の向上をお願いできませんか？

僕らにとっては教室の改修と同じくらい設備の向上も重要なんです」「それで？」

「もしも喫茶店がうまくいかずに設備の向上が危うかったら、そっちが気になって大会に集中できずにも学園長も困ったことに……」

「なんだ、それだけかい。ダメだね。そこは譲れないよ」

「でも！ 設備の向上を約束してくれるなら大会だけに――」

「明久、無駄だ。ババアに譲る気が無いのは明白だ。この取引に応じるしか方法はない」

「そうですよ。私達は入学当初にその設備についての講習を受けたはずです。今更どうこう言えたことではありませんよ」

気がついたらいつの間にか雄二が正気に戻っていたのでとりあえず、言っておきましょう。

「わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら交渉成立だね」

学園長はどこか『計画通り』といった顔をしてニヤリと笑いました。

「ただし、こちらからも提案がある」

雄二が学園長に言いました。さすがは雄二ですね考えることが同じです。

「なんだい？ 言ってみな」

「召喚大会は2対2のタッグマッチ。形式はトーナメント形式で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

試合の迫力を出すという理由でこの形式になっていると聞きますが……
……もしも……

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

雄二の考えどおり、もしも、自分で科目が決められるとしたら。

「そうさねえ……いいだろう。点数の水増しとかだったら断っていたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「ありがとうございます」

もしも科目が決められたら、いくら頭が悪くてもこっちには分があります。

雄二の目つきが一層鋭くなる所を見るとどうやら私と同じことを疑問に思っていたみたいです。

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」

学園長が念を押してきます。

「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

「ああ。因みに私も召喚大会に出るので……全力を尽くしてみますよ」

雄二の表情がやる気全開のそれになっていますね。

私は、あの不幸なモードが出ることを恐れながらですが……アレが出たら一巻の終わりですし。

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないようにして下さい!!!」

「んで、音橋はどうして出るんだい？」

学園長が私を指して質問します。

「……強制的に、です……」

「そうかい。それじゃ、アンタたち。任せたよ」

「了解っ！」

「……分かりました」

学園最低コンビの結成をよそに、私は目を光らせていた。

よからぬ事が起きなければいいのですが……

第13話「学園長室」 (後書き)

投降するの忘れてたんだ (テヘツ) () () (殴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3818w/>

BTS～転生しても変わらない～

2011年12月19日21時52分発行